第10回「文芸思潮」エッセイ賞 発表

二〇一四年度第10回「文芸思潮」エッセイ賞に四七七篇という多数の御応募をいただき、まことにありがとうございました。今回も若年層から八十歳代の老年層まで幅広い世代から寄せられたばかりでなく、アジアやヨーロッパなど世界中から広く御応募をいただきました。また貴重な体験だけでなく、重要な記録や、社会に対する鋭い批評も多く寄せられ、現代に生きる人々の様々な姿が如実に窺われる10回の節目にふさわしいコンテストとなりました。

例年の通り、まず選考委員会予選担当による第三次までの予選選考が行なわれ、最後に三神弘、水木亮、福岡哲司、都築隆広、五十嵐勉五人の選考委員によって討議されました。厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

今号には当選作および優秀賞を発表させていただきますが、以後奨励賞なども、極力「文芸思潮」誌上に掲載させていただく予定です。御期待ください。

なお授賞式は明年二月十五日（日）大田区民プラザで行なわれる予定です。受賞者以外でも参加できます。たくさんの方の御出席をお待ちしております。

「文芸思潮」エッセイ賞

最優秀賞

「オパールの指輪」　清水文子（東京都渋谷区）

「脚を創ろう」　印南房吉（神奈川県横浜市）

社会批評賞

「タイヤ検死官」　竹中水前（東京都葛飾区）

「パキスタンの乾いた風」　岡野真弓（東京都新宿区）

社会批評特別賞

「続・私の『松川事件』」　高原万里子（宮城県白石市）

優秀賞

「三十三年目の富士山」　板東洋三郎（神奈川県横浜市）

「おふくろの指文字」　宮川行志（熊本県宇城市）

「足跡」　家森澄子（岡山県倉敷市）

「アオサギのいる風景」　井上幸子（岡山県津山市）

「ランドセル」　西本美彦（滋賀県大津市）

「子牛の涙」　八束一臣（鳥取県境港市）

「ハナの墓」　近藤幹夫（福井県勝山市）

「小さな運び屋」　竹澤一晃（埼玉県さいたま市）

社会批評優秀賞

「再会」　高橋由紀雄（北海道赤平市）

「贅沢列車」　濵田亜梨紗（京都府京都市）

奨励賞

「柿の味」　山崎入功（長野県安曇野市）

「戦争の記憶」　中川一之（京都府京都市）

「賀状」　遠藤芳子（東京都狛江市）

「インドの夕日、そして闇の中へ」　坂本那香子（神奈川県川崎市）

「今夜でもいいよ」　牧　康子（東京都杉並区）

「凛」　蘭　藍子（愛媛県松山市）

「返事～2011.5.11～」　佐藤ゆみ子（宮城県仙台市）

「道化師になれぬなら」　すずきみのり（静岡県三島市）

「長谷川先生」　日沼よしみ（山梨県南アルプス市）

「父の辛子漬け」　中村行寿（岩手県滝沢市）

「文盲」　藤原恵子（北海道札幌市）

「オモニハッキョと妹と」　きひつかみ（大阪府柏原市）

「草むしりの奇跡」　吉永祐治（鹿児島県鹿児島市）

「ライムライト」　きむ キョンヒ（東京都世田谷区）

「誰がために今はある」　逢坂栄紀（千葉県松戸市）

「殺されるのか!?」　西島雅博（福島県いわき市）

「祖父の長火鉢」　大樹独活（三重県四日市市）
「中庭の風景」　マイヤー三四子（Zurichi Switzerland）
「感じること」　オリーブ（神奈川県鎌倉市）
「母の手」　松本　柊（東京都八王子市）
「山村の癒し人」　加川真美（京都府京都市）
「漁師の流儀」　武村三幸（埼玉県川口市）
「弟」　瀬川真一（三重県名張市）
「祖母の織った半幅帯」　武藤蓑子（東京都多摩市）
「松山」　ともりんたろう（東京都中野区）
「閉店前夜」　小野友貴枝（神奈川県秦野市）
「線路工手の歌」　奥田　登（京都府相楽郡）
「琵琶湖の阿弥陀はん」　よすみこうすけ（大阪府高槻市）

社会批評奨励賞

「ほぼ完璧な社会の幸せ？」　中田和子（Nordborg Denmark）
「強いられた連想」　諸原龍之介（東京都港区）
「三菱重工業爆破事件――そのとき私は――」　浜木綿（東京都世田谷区）
「目の中にある生と苦しみ」　坂部一美（愛知県知多郡）

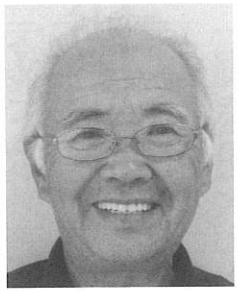
科学記録奨励賞

「銀河の星の海への旅路に就いた『航海者』」　漆畑晨斗（静岡県駿東郡）

選評

コンクール十年の実績

水木　亮



みずき　りょう

1942　北朝鮮生まれ
99　小説「祝祭」で第16回織田作之助賞受賞
2006　小説「お見合いツアー」で第49回農民文学賞受賞
07　小説「海老フライ」で第19回労働者文学賞受賞

エッセイコンクールも一〇年を迎えた。年々充実してきて、今年の作品は質的に高いものが多かった。継続は力なりにふさわしく、五十嵐編集長の強い意志と、審査員が一人も欠けることなく、ここまで続けてきたことをその一人として喜びたい。

今回もそうだが、選考していて一番楽しいのは、自分が知らないいろいろな人々の人生体験を知ることだ。一〇〇のエッセイには一〇〇の体験がある。そして、その人だけしか知らない事実が語られるとき、人間とはかくも複雑怪奇な人生を生きているものか、こんなに悲しい、そして楽しい、感動的な人生を生きているのかと、今更ながらその生き様を我が身と重ね合わせてみるのである。

平凡に見えるが、人生は八割方不幸なことが占めているようだ。後の二割が救いであり、それは不幸な人生に前から向き合い、格闘し自分で切り開いた世界のようだ。今回海外の体験を書いた作品が比較的多く興味深かった。

それは私が知らないからであり、知らないことは誰でも興味がある。エッセイを書く上での基本のひとつとも言えよう。

最優秀の清水文子さんの「オパールの指輪」は力作である。戦争が終わり七〇年になろうとしている今、幼い日の原爆に関わる小母さんの記録が鮮やかに浮かび上がる。少女が小母さんの顔に湧くウジを取った記憶。

お礼にオパールの指輪をあげる約束をしたが、事情でそれがなくなっていたこと、それを黙っていればすむことを、小母さんが忘れず気にしていたことなど、そこから苦難の人生の裏が透けて見える。

「こまい手で一生懸命ウジをとってくれてありがとうね」

なんというやさしい言葉であろう。このエッセイのよさは重大な事実に対して、少女の汚れのない目で向かい合っている姿だと思う。宝石とウジの対比が作者は気がつかなくても私たちに悲しく迫ってくる。人類は再びこういうことを経験してはならない。

同じく最優秀の印南房吉さんの「脚を創ろう」は、作者の継続したよい意味での執念に感心した。

竹中水前さんの「タイヤ検死官」は「タイヤ」という「物を通して考えさせるエッセイ」として今回最高のエッセイであった。シベリアの凍土から灼熱のサハラ砂漠まで、どんな場所でも有能なフランス製のタイヤに対抗して、それに負けない日本製のタイヤの開発が始まる。質のよいタイヤを製造するために、凍土や灼熱の大地を歩き、いかにタイヤが命を終えたかを調べるのが、「タイヤ調査官」である。それに関わった筆者が、ぼろぼろになりその命を終えた世界の果てに眠る日本のタイヤを思うとき、無機質の物と人間の心が熱く通い合う瞬間を経験する。最優秀にも劣らない見事なエッセイである。

松本柊さんの「母の手」は、思春期にある娘の多感な感

佳作

「白い海」　かまだまこと
「妻の介護」　郷　芳美
「紙風船」　南條美起子
「小さな命」　望月ひろこ
「彷徨の思い出」　棚谷大地
「ピアノと私」　南実りえ
「取り戻した親子の絆」　内山　正
「枝垂れ桜」　嵐めぐみ
「蝶と琥珀」　姉人妹
「客家とフェニキア人」　北島一郎
「遠い音に乗って」　安芸　遙
「投稿歴三十四年―私の文学彷徨」　李耶シャンカール
「蘇ったオリンピック選手と、我が肉声」　佐藤義弘
「近くて遠かった場所」　森千恵子
「ゴールデン街の夜」　ふじさわ裕子
「霧の海」　吉田はるみ
「大は小を兼ねぬ」　ならはたかし
「樺太からの葉書」　竹浪和夫
「金山伝説（遠い夏の日）」　戸澤洋二
「蜂の巣無残」　八木春捷
「お金のフン」　金田一　淳
「ネコの母性愛」　村松佐保
「『すいとん』と」　塚原　渉
「東京浪漫」　中村こより
「かえろう」　山口里佳
「脳梗塞を病んで」　山崎文男
「できた嫁さん」　中田澄江
「肥後守」　山県大慈
「フットした記憶」　立山　紘
「エリート」　田澤　昇
「百年目の日記」　高木　都
「兄の訃報」　谷都留子
「百日紅」　鈴木あぐり
「膝痛」　飯島もとめ
「大工たちの棄てた石」　川畑和嗣
「変えるということ」　木原鈴奈
「アムステルダム」　姉歯浩一
「賞とは　妙薬なり」　外山寛子
「縁は異なもの？」　今田淑子
「回帰」　下村きよ子
「集団就職」　後藤次郎
「山桜の散る頃」　吉田宏子
「宝箱」　堀渕理恵

情に揺れ動かされる自分を、かって自分が母親に向けていた感情とダブらせながら書いた。身近な母子の問題でわかりやすく、母の手に寄せる娘と自分の思いを、親子三代に重ねながら、女性の繊細な心のひだを描く、味わいのあるエッセイになった。

蘭藍子さんの「凛」は老いた婦人が、凛という子犬を飼う話で、なついたよい犬であったが、身体が限界で張り紙を出し他人に飼ってもらうことになった。その犬との別れと、共にいた楽しい日々を、形見である「カンガルーに輪のついた玩具」に寄せて思う話で、高齢者の最後の風景がよく切り取られている。

板東洋三郎さんの「三十三年目の富士山」は、ブラジルに移住するときに見た富士山の姿。それから苦難の時を経て十数年後、家族と帰国したとき迎えてくれた富士山の姿。その山に感動し、実際登山した様子を書いた。外国に出ることで、初めてわかる富士山の美しさがよくわかるエッセイである。

西本美彦さんの「ランドセル」は、戦後の貧しい暮らしの中で父親がランドセルを買ってくれた。しかし、雨の日、泥の中に落ちたそれは厚紙に布をはった物で紙粘土のように崩れた。この辺りの描写が悲しみと共によく光っている。筆者に忘れられない光景であろう。

佐藤ゆみ子さんの「返事」は東日本大震災の当日のこと

「修業」　栗山惠久子
「鋸岳・角兵衛澤出合まで」　小林理樹
「ふたつの出会い」　稲葉まき
「卒業」　川島英理沙
「コウセイという仕事」　御室　孝
「そんな名前の子が……いたような気もする」　丸山　史
「私のソールフード」　新井洋一
「夏の思い出」　鈴木アユミ
「『ベルリンの壁』考」　黒田隆幸
「ハイボールとどらやき」　平川美七子
「隣の便利屋」　林　直子
「あの日の天国」　西　拓規
「僕のママ」　平原J
「望郷の〝じゃけぇ〟」　さいとうみち子

社会批評佳作

「十六インチの窓」　吉田　菜穂子
「白色、黒色、そして黄色」　宮本　倫好
「信念を貫いた『むつ市』市長」　黒岡　實

を書いた。教員であるため、自分の子供のことが後回しになった。子供は助かったが食器などみな割れていて、それらが自分たちの身代わりになってくれたという謙虚な気持ちに打たれる。

家森澄子さんの「足跡」は六年生の時、母親が亡くなり、五歳の妹が養女に出されたことが書かれている。近隣に住むことになった妹は、家族恋しくけなげに菓子を持参し、実家の郵便受けに入れるのである。雪の日に菓子を持参した妹が、つまずいて転んだ足跡が書かれている。その姉の視点が切なく鮮やかでよい。

奥田登さんの「線路工

入選

「みゆきちゃんと母」　宗像善樹
「目覚めようとするオジン」　温故居士
「苦しい人生」　田中浩司
「イエス・キリストと私」　清原雅富
「定期検査で得た伴侶」　鳩　平和
「墓参」　上杉　辰
「人情の古里浜松」　岩谷隆司
「雑司ヶ谷霊園を歩く」　上原鉄男
「最晩年の挑戦」　木下訓成
「おくやみ欄」　藤井典央
「『お金持ち』の階段」　ゴルビー長田
「清水寺」　橘　史人
「生きていける」　瀬戸めぐみ
「いつか君を好きになる」　正岡　順
「最後の帆走」　山田和彦
「記憶の生き物たち」　寒川靖子
「僕が精神病院に沈められた訳」　武田慶雨
「救われた命」　山本　勝
「猫の恩返し」　村田直美
「鬱と卒業パーティー」　一　一
「スス竹奮闘記」　早月春美
「これからどうしますか？」　藤原佑伎子
「定年後再就職をして」　池田義朗
「固い約束」　川瀬　潔
「空飛ぶ自転車」　小木蓮華
「男の日傘」　池田　裕一
「医療のそもそものあり方」　赤井ナノカ
「教頭先生と『はだしのゲン』」　栗栖じゅん
「幼なじみ」　苑田有子
「アニサキス」　久能格代
「S君のこと」　北の大地
「青春の定時制高校」　龍口　宏
「サツマイモ」　六藍光洋
「白い空」　溝口あかり
「黙って食って帰れ」　林なおと
「定年旅行でカンボジアへ」　黒田直隆
「夜の散歩道」　池山弘憲
「最愛の妻」　光瀧仁美
「むかし」を歩く　本間淑子
「五弁の桜花（はな）」　南雲佐和
「ララは天国に」　世波場葉
「ぼっけもん」　片山二郎
「君よ、コントローラをそこに置きなさい。」　九人龍輔
「記憶果てるとき」　浜田和保
「考える方面を考える」　佐々木里奈
「鳥取の大火」　横山緝子
「ボードレールの声がきこえる」　井上哲朗
「青衣の女」　松田義尚
「一山一家の末裔」　幸田茉莉
「みぎわの墓碑銘」　田窪宣彦
「東海さんと、東京オリンピック」　湯来紗智子
「今私は生きています」　細羽美咲
「父と母が起してくれた」　守藤　康次

手の歌」は、珍しい線路に工事に関わる労働の歌が書かれていて、私は個人的にも好きである。工手の生き方、それを支えた妻、それらが微笑ましくまとまっている。

竹澤一晃さんの「小さな運び屋」は少年の日の闇屋の運び屋の貴重な体験を書いた。混雑で母親とはぐれてしまった少年が、再び母親と再会する場面に感動する。これは筆者にとって何物にも代えがたい光景であっただろう。

濵田亜梨紗さんの「贅沢列車」は中国の取引先の工場の現場を体験した話が書かれている。私たちの知らない現実があり、やはり隣国のことを正しく学ばないといけないことを感じさせる。力のある書き手だと思う。タイトルは今の日本を象徴している。

坂本那香子さんの「インドの夕日、そして闇の中へ」は、美術館でみた一枚の絵から、息子とシンガポールに単身赴任し、たまたま見たインドの夕日を思い出す。その夕日が自分にとって一つの輝いていた時代への別れの瞬間だったという。私たちは過去に戻ることなく毎日前へ進まねばならない。一枚の絵画からの連想と想像がとても豊かに感じられるエッセイである。

加川真美さんの「山村の癒やし人」はフィピンの按摩術ヒロットの話だが、その手技治療の様子がとても魅力的に書かれている。どこに住んでも人間は素晴らしいと思う。

村松佐保さんの「猫の母性愛」はそのタイトルの通り、母猫の気持ちがよく描かれていて心を打つ。

井上幸子さんの「アオサギのいる風景」は、原爆ドームの鉄骨の間に止まっていたアオサギから、投下されてからの時間を思う。美しい絵のような構図が想像される。

牧康子さんの「今夜でもいいよ」はこういう人生もあるかと驚かされる。自由奔放な行き方をした人の最後が哀れで、若き日とその対比が悲しい。

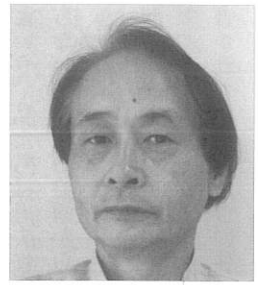
八束一臣さんの「子牛の涙」は育てた子牛との別れがよく描かれていて泣ける。

瀬川真一さんの「弟」は、不幸せな環境にあった弟について、あらためてそれを理解したい兄の気持ちがよく表れている。ある意味弟への償いをすることで兄のこころも安らかになるだろう。人間は誰にでも大なり小なりこういう悔いが存在すると思う。それを償うことは自分の心の平安でもあり、相手に対する供養でもあると思う。

このコンクールも来年は十一年目、さらに新しい段階を目指す。日本のエッセイコンクールの歴史に残るような、素晴らしい成果を期待したい。

運命と人生の輝き

五十嵐 勉



いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ
79「流謫の島」で群像新人長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館文学賞受賞

「文芸思潮」エッセイ賞も一〇回を迎えて、ますます充実した観がある。読ませる作品、味のある作品、感動する作品、意義深い作品が、回を重ねるごとに増えてきて、多様な人生の深い体験世界を開き示してくれる。ほとんどの作品に、「何か」があった。全体の手応えは、ますます重くなっている。

生きてゆくことにはこんなこともあるのか、人はこのように困難を乗り越えてくるものなのかと、その苦闘の軌跡や、苦難の刻印に、胸を揺さぶられ、肺腑を抉られることがしばしばである。命という限りあるものの姿の、真の輝きを放つ瞬間が人生には確かにある。それは苦闘を越えたのちであるかもしれないし、苦闘のただ中であるかもしれない。あるいは発見や気づきの一瞬であるかもしれない。いずれにしても、それらを書きとどめることの意義は、自身の人生の意味を探ることでもあるだろう。輝きを覚える作品はまた、その人生や生き方や発見に、人の胸を結ぶ共感を有する結晶体でもある。

今回特にそれを覚えた作品は、印南房吉氏の「脚を創ろう」と板東洋三郎氏の「三十三年目の富士山」だった。

印南氏はこれまですでに九年連続で入賞しているベテランだが、脚を失うという運命のアクシデントを、自身の「物を創る」創意工夫の力として、生きる方向を決定していく節目を描いている。その力強さがすがすがしい。脚をなくしたそのときは絶望のどん底だったはずで、それを光の方向へ踏み出していく一歩が、周囲のあたたかさとともにたくましく描かれている。それは、その方向で真っ直ぐに生きて来た現実の道程を振り返る現在の充実感があるからこそ、肯定ができ、生の秘密に触れることができるものだ。氏の運命の結節点をしっかり取り出して真の輝きを付与している点で、これまでの集大成にふさわしい一作と見て、最優秀賞に強く推した。この作品とこれまでの積み重ね、そして氏の人生に心からの拍手を送りたい。

板東洋三郎氏の「三十三年目の富士山」は、安保闘争に敗れて新しい南米の天地に夢を求めていくロマンと挫折と

苦闘を蔵して、外国での波乱の人生の回帰を故国の富士の姿に重ねて浮かび上がらせてくる。ここにある雄大で深い感懐は、地球の半分を彷徨って自己の人生をもがき希求する切実な苦闘の爪痕に裏付けられている。故国というものの姿、そして回帰し得た自己の大きな命の軌跡をあらためて感じるところにこそ、富士のすばらしい姿が立ち上がってくるのであって、富士の美しさは、その壮大な回帰をし得た者の前にこそ現れてくる故国の美しさにほかならない。それを表現し得ている点で、私は高く評価した。

清水文子氏の「オパールの指輪」は、選考委員の総得点が高かっただけあって、自分の身近にあった好材料をよく温存してまとめあげた好エッセイである。原爆の傷や、広島で被爆者として女性一人で生きていくことの困難や心の傷などを間接的にうまく掬い上げ、過不足なくまとめている。何度も推敲されたことが窺える結晶度に苦心の跡が見える。その努力が輝いている作品と思った。この「伯母さん」は、なぜか読んだ者の胸にいつまでも生き生きと残る不思議な生命力がある。

今年は社会批評の領域が豊作で、すばらしいものがたくさん集まった。なかでも竹中水前氏の「タイヤ検死官」と岡野真弓氏の「パキスタンの乾いた風」は出色で、新鮮な見方、真実の見方に目を開かせられた気がした。「タイヤ検死官」のタイヤから世界や経済を見る視点の明晰さは実に鮮やかであり、「パキスタンの乾いた風」は、日本の日常の中で見る同情と、現地で生きる女性としての生き方の齟齬を、みごとに剔出していた。前者はタイヤの呻き声が聞こえてくるようだったし、後者はパキスタン女性の笑顔や吐息が浮かんでくる気がした。どちらも、長い実直な経験の上に書かれた厚みと確かさを感じる作品でもあった。

炭坑の現実をつぶさに記した「再会」（高橋由紀雄）は、危険で厳しい坑道内での労働を生々しく伝えていて、働いていた人たちの無念の思いがよく届いてきた。「贅沢列車」（濵田亜梨紗）は、日本の下請けの中国のアパレル工場の現実をよく描いて、日中の軋轢を工場労働者の立場から解きほぐしているのが好感が持てた。この誠実さと、反照としての日本の現在のあり方を突く批判は鋭く、すがすがしい。その他にも社会批評は鋭利なものがたくさんあったが、異色は「続・私の『松川事件』」（高原万里子）で、松川事件の真相を肉親の立場から掘り起こしている筆はきわめて貴重である。ただ、事件そのものの内容が書かれていないので、どこに問題があり、何が争点だったのか、隔靴掻痒のもどかしさがある。これに事件を知らない人も読めるような論点の剔出を添えたら、問題作になったかもしれない。社会批評特別賞を贈ったが、それを整えた上で発表してもらうことにした。

優秀賞は、粒ぞろいで、数を絞るのに苦労した。「足跡」

（家森澄子）の妹のけなげな行為は、不運の中で生き合う心のつながりを描いていじらしく、「おふくろの指文字」（宮川行志）は、戦後の初めての総選挙がよく浮かび上がってきて、女性として投票する、字が書けない母親の姿が鮮烈である。「ハナの墓」（近藤幹夫）は、蹄鉄業の衰微をとおして見える耕耘機など農業の機械化の変遷が、ハナというおとなしい馬の姿に沿って美しく描かれている筆致がすばらしい。機械化の裏面をこれほど動物の立場から愛惜深く美しく描いた作品を私は知らない。ハナの墓が農業馬全体の墓として、読む者の心にいつまでも残る秀作である。「アオサギのいる風景」（井上幸子）は、都会から離れたところに住む筆者の一連の動物物語に属するものだが、今回特に淡々としたアオサギの生態のなかに、原爆など人間のはかなさや鎮魂をさりげなく重ねているところに、いっそうの奥行きが感じられた。深まりを讃えたい。「ランドセル」（西本美彦）の筆者も続けての応募だが、戦後物資のない頃の粗悪なランドセルの思い出を活写している子供の情景は時代を伴って鮮やかである。

「柿の味」（山崎人功）の味わい深さは優秀賞のレベルで、エッセイの醍醐味を堪能させられた。深く胸に残る。

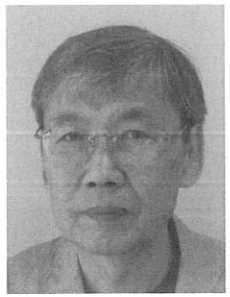
記録として重要なものもいくつかあった。「戦争の記憶」（中川一之）も悲惨な現実の残存にしっかり手を触れている。それが自身の生き方にも繋がっている自覚が筆を確かにしている。「樺太からの葉書」（竹浪和夫）は前半は興味深く、よく書かれていたが、後半の「戦後」の認識が甘く、全体を壊してしまった。戦争が終わったのは八月一五日であることはしっかり認識してほしい。以後はソ連の犯罪である。「返事」（佐藤ゆみ子）は地震・津波の記録として残るべき貴重な作品である。「三菱重工爆破事件」（浜木綿）も迫真の重要記録で、これにいくつかさらに作品を重ねると、当時の事件がより立体的に再現されてくるだろう。ビル街のガラス被害は、地震の参考にすべき点を含んでいる。

海外生活からの斬新な感慨や見方はさらに増える傾向にあり、鋭い作品も多かった。「インドの夕陽、そして闇の中へ」（坂本那香子）は、多国籍社会で働く女性の世界的な生き方と日本の閉ざされた生き方が対比的に浮かび上がってきて地球的な広がりを感じる作品である。「山村の癒し人」（加川真美）のフィリピンの整体師の体と心を癒す方法に、日本や西洋の文化の固い形が反照されて、現代が見失っているものをよく照射している。この二作品は特に質が高い。「アムステルダム」（姉歯浩一）は、アルバイト放浪と大麻の酩酊との極地を生き抜く頽廃の生をみごとに描いてその虚無感がよかったし、スイス・チューリッヒで永く生活する近所の居住風景の変遷を描いた「中庭の風景」（マイヤー三四子）も、生活空間と時間を鮮やかに

切り取っていた。

学校生活と教師の姿も興味深いものが集まった。「松山」（ともりんたろう）、「長谷川先生」（日沼よしみ）、「縁は異なもの？」（今田淑子）、「エリート」（田澤昇）など、卒業後の教師像も含めて人生の複雑さや豊かさを描き出しており、特集ができそうな作品群である。

これら以外にも、さまざまに世界を切り取ったおもしろいエッセイがたくさんあった。スペースの関係でもう触れることはできないのが残念だが、今回も深く豊かな人生の諸相を見せてもらった。このように充実したエッセイ世界は、他にないかもしれない。これらを読者とともに触れて共有することで、互いの心を豊かに深くしていきたい。エッセイ賞の最も重要な部分はここにある。一〇回を数えることができたことに、衷心より感謝したい。



みかみ　ひろし

作家
1945 山梨県甲府市生まれ
法政大学中退
1982「三日芝居」で
すばる文学賞受賞
著書「三日芝居」
「花供養」
「月と五人の男」

澄んだ目の観察者

三神　弘

最優秀賞の清水文子「オパールの指輪」は、少女の澄んだ眼差しが描く広島の被爆、戦後の家族、身内の暮らしぶりである。広島から避難してきた伯母さん一家は「幽霊」のようだったというが、おばさんの指には、いつものオパールの指輪が光っていたという。このオパールの指輪は、伯母さんのこれまでの暮らしのあかしであり、また、少女はかねがねこの宝石に魅せられてもいて「夢の世界に吸い込まれる」ようだと、無邪気で、素朴な感受性を、刺激させられてきた。

オパールの指輪をはめた伯母は、被爆し、無残にも「額と脛に裂傷を負っていて、そこにウジが湧き」、ウジは、次から次へと出てくるようになった。この朝夕に絶え間のないウジを、割り箸でとるというのが、少女の仕事になった。しかし、少女はウジ虫に顔をそむけるのではなく、気味悪がりもせず、この仕事を「ゲームのように」楽しんだという。

読者は、オパールの指輪への憧憬といい、ウジ虫とりといい、好奇心あふれるひとりの少女を身近にし、観察者としての信頼を深めていく。また、町が洪水に襲われ、馬や

牛が流されてきたとき、「おじさんたちが鍬を片手に引き上げようとする」のだが、その光景を、少女は「童話の世界のよう」だと、珍しげに眺めもする。

物語は、少女とともに、オパールの指輪が、いつか伯母さんの指から消えていったことへの関心に向けられていく。そして、戦後の生活の過酷さ、伯母さんのおかれた境遇、生き方を、あれこれと想像させられる。もう、二度と「妖しい光」を覗き込むことも、せがんで「持たせて貰う」こともできなくなったオパールの指輪の行方も、謎解きがでないままに、もうひとつの物語になっていく。

さて、澄んだ目の観察者だった少女は、やがて、成人し、結婚をし、歳月を経て、「原爆病院に入院」しているという伯母さんを見舞う。そして、何人もの家族、身内の死に思いをめぐらせながら、「原爆のせいだと、いまでは思っている」との、感慨をもつ。少女の澄んだ眼差しが報告する戦後の日常の向こうに、やがて見えてくる世界がある。作者の立っている場所がある。

最優秀賞の印南房吉「脚を創ろう」は、失ったところからはじまっていく再生の物語で、人生に立ち向かう果敢さに圧倒される。「船に乗り世界一周をめざした」という二十四歳の青年は、船上での事故に遭い、左足切断という試練に見舞われる。だが、青年は運命を呪うこともなく、ひたむきにリハビリに専念し、筋肉を鍛え、そして、義足づくりと、山道を登るなどの訓練に励む。義足を「わくわくしながら穿いた」といい、「歩けるのが無性に嬉し」かったともいう。今日を、懸命に生きようとする青年の風貌が、頼もしい。義足を穿き、裏山を登り、見晴し台から、「見えた、水平線」と、海を眺める場面は美しい。題名の「義足を創ろう」は、作者からの、よりよく生きることを喚起する呼び掛けであり、読者へのメッセージにもなっている。

宮川行志「おふくろの指文字」は、母親にこっそりと打ち明けられ、頼まれ、文字を教えるという話である。母親の生きた時代が回想され、女性の社会参加への目覚めもとよりだが、なによりも、歳を経てから母親と息子とで、ひそかに学び合うひとときが、睦まじい。

家森澄子「足跡」は、家族の情愛に満ちた作品で、家族の関係が丁寧に描かれているので、一人一人に感情を重ねながら、読むことができ、読者に手渡すものが多い。

西本美彦「ランドセル」は、戦後の貧しい漁村に、無邪気で、元気な子供たちが活躍する。春となり、貧しい少年にもランドセルが贈られ、喜びはこの上ないが、梅雨になり、ランドセルは雨に濡れて無残な姿に化し、それは紙製であったことが知らされる。おかしくはあるが、笑いというのは、一度だけのものである。ランドセルの種明かし、ということだけではない作品づくりもあるはずだ。つまり、結末で少年は、泣きすぎる。このことで、父や、母が、曇ってしまう。

実積のある武藤蓑子の「祖母の織った半幅帯」は、興味深い題材を扱いながら、表現過多で、読者が参加しにくい。作品は、作者と読者が創るものだとするならば、読者の領分がそこなわれている。森澤佐登子「凛」は、生のなまなましさ、グロテスクさを描いて、大いに評価したが、犬の名前が「凛」というのでは、あやしさも薄れてしまう。

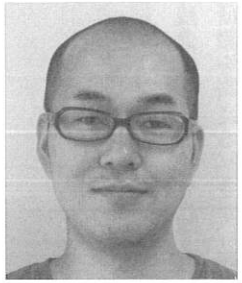
いいエッセイ、味わいのあるエッセイを読んだなと、読後の喜びを得られた作品に、近藤幹夫「ハナの墓、」中村行寿「父の辛子漬け」、井上幸子「アオサギのいる風景」、藤原恵子「文盲」、竹澤一晃「小さな運び屋」、山崎人功「柿の味」がある。

コンセプト系エッセイも奨励しています。

都築隆広

議論が白熱し、〝詩のボクシング〟ならぬ、審査員同士の〝言葉のボクシング〟の場と化しつつあった記念すべき十周年エッセイ賞選考会。本物のボクシングに発展しないかとハラハラドキドキしながら見守っていたところ、当選作は「オパールの指輪」と「脚を創ろう」の二作に決まりました。まず、平均的支持を集めたのは「オパール～」でしたが、広島の原爆描写があまりに間接的で、過去の当選作と比肩できるのかという声もありました。

このエッセイの舞台である広島県三次市には、私も学生時代に訪れたことがあります。そのときは「触ると三十日間、妖怪が次々あらわれる」という伝承がある、郊外の〝たたり石〟を触りに行く旅だったのですが、ディーゼル列車の芸備線で広島市街からカタコト、二時間以上は山奥に分け入らないと辿り着けない盆地の町でした。「オパール～」では原爆投下数日後に市街から主人公の親戚達が避難してきます。記録として読んだ場合、原爆被害者の方々の一般的な証言よりも本作の記述が客観的になってしまうのは、この広島市街と三次市の距離感を考えれば頷けます。



つづき　たかひろ

1978 山梨県生まれ
東海大学文学部卒
2002「看板屋の恋」で第91回文學界新人賞受賞
「狼を見る」（文芸思潮）
「ハネムーンきどり」（三田文学）他　短篇映画「ウミスズめし」（脚本）　現在TVのナビ番組など　の構成作家としても活動中

むしろ、芸備線が原爆投下直後にも早々に復旧していたことが驚きで、エッセイ本文から、こうしたローカル要素が読者に伝わりにくかったのが残念でした。

なお、個人的にはラストの伯母さんとの掛け合いに息を呑みました。素朴な人の優しさがきらめく、美しいエッセイです。

一方、「脚を創ろう」は連続十回入賞、回を重ねるごとにクオリティを上げてきた印南さんへの敢闘賞の意味も込めての受賞ともいえます。〝脚を失う〟というテーマを繰り返し書いてはいても、毎回、切り口を変え、しかも今回は〝脚〟の問題の最深部へと切り込んだ内容になっています。義足が合わずに試行錯誤するところなどはサクセスストーリー風で、やや自慢話にも感じられる記述があるのは残念でしたが、それでも読ませます。常連入賞者の長年の研鑽を讃えるべきか、総合得点で「オパール～」をとるかは、審査員にとっても頭の痛い問題でした。

実は「文章が端正だから」という理由で私が支持したのは、奨励賞の「祖母の織った半幅帯」でした。しかし、他の選考委員から「そこまで端正な文章でもないだろう」とご指摘をうけまして、いわれてみると、あったかいご飯に、ふりかけの上から生卵をかけてしまったかのような、過剰な文学的装飾も見うけられます。とはいえ、認知症介護という救いようのないテーマにも関わらず、読後感が悪くないのは、結末の一文が全体を引き締めているからでしょう。

他の奨励賞作品では「くじら騒動」なる面妖な事件を扱った「漁師の流儀」、琵琶湖に浮かぶ島で営業している一軒の民宿に泊まりに行く「琵琶湖の阿弥陀はん」を楽しく読みました。特に「琵琶湖の～」は、そんなフィクションめいた民宿が実在するのかと、思わずインターネットで検索して宿をつきとめてしまったぐらい、ユニークなエッセイでした。

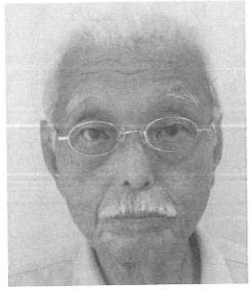
では優秀賞が良くなかったのかといいますと、そんなこともなく、滑稽なオチながら、そこはかとなくノスタルジー漂う「ランドセル」。タイトルでネタバレはしていても、繊細な動物描写が光る「子牛の涙」などは秀逸でした。

タイトルといえば、変わったテーマを取り上げつつ、題名を見れば内容が一目瞭然の作品を〝コンセプト系エッセイ〟と私は仮称しています。「タイヤ検死官」「ゴールデン街の夜」「金山伝説（遠い夏の日）」……他、下読みから最終選考にかけて、こうした作品には上位入賞を期待していました。しかし、結局、選考会で審査員支持を集めたのは、ブリジストンのタイヤ技師という特殊な経歴を持つ作者による、社会批評賞「タイヤ検死官」のみでした。選考会で粘る作品はやはり「オパール～」や「祖母の織った～」のような人間ドラマ中心で（「脚を創ろう」はコンセプト系といえなくもないですが）、タイトルだけ見て、

「お、これは金山の話だな」とか「ゴールデン街か……」と内容を読者に把握させられる、シンプルでキャッチーな作品が次々と競り負けてしまったのは残念でした。

同じくコンセプト系でも、「子牛の涙」「凛」「ネコの母性愛」など、いわゆる動物モノは涙もろい水木亮審査員がいかにも絶賛しそうでしたから、難癖をつけてやりたいのも山々です。ただ、私もシマリスから長ザメまで飼育してきた動物愛護精神あふれる人間ですから、つい耽読してしまいました。とはいえ、どの作品もタイトルには、もう少し工夫が欲しいところかと。

総括としていえることは、やはり人間ドラマを描いた方が上位入賞は確実です。しかし、そこをあえて、へんてこりんなテーマを描こうという、勇気あるマニアック作品を愛惜せずにはいられません。当選作が決まる裏側で、奨励賞以下も、まさに奨励したくなる作品ばかりの第十回選考会でありました。



ふくおか　てつし

1948 山梨県甲府市生まれ
樋口一葉研究会員
都留文科大学非常勤講師
著書「評伝深沢七郎ラプソディ」(TBS ブリタニカ第3回開高健賞奨励賞)「遠い散歩近い旅・山梨文学散歩」(山梨ふるさと文庫)ほか
「猫町文庫」編集発行人

「眼」と「ことば」

福岡哲司

十年目を迎える今回、際立った作品はなかったが、いずれも面白く読ませてもらった。平均的な作品のレベルは向上しているのではないか。

十年間作品を読ませてもらううちに、気付いたこともある。それは、書けば書くほど駄目になるということもある、ということだ。個々人の入選結果を見ても段々にランクが落ちて、やがては選外ということもあるかもしれない。これはなぜだろう。

文章が題材（モチーフ）に頼りすぎているからだと思う。辛い経験、珍奇な体験、インパクトのある見聞……これは誰をも動かす。表現の多少の欠陥をもすっ飛ばして入選することもありうる。ことに本誌のようにテーマ性を評価する傾向のある雑誌ではそれが顕著である。

ただし同じ題材ばかり描き続けるわけにはいかなくなる。書く方も取り組みに力が入らないし、読むほうの関心も次

第に薄れる。

こうなると、日常性の観察の徹底や描写の緻密さ、表現の的確さこそが勝負の分かれ目になる。素材に加えて、味付け、技術、提供の仕方等々である。

この国のエッセイ――随筆の伝統は、元来「こと」に頼ってこなかった。「こと」を重視したのは「記」であり、たいていは宮中や個人の公卿・武家のなんでもない、しかし、詳細な「こと」の「記」である。これは、後世の学者の外の読み手を予定しないから、淡々と綴っても一向に差し支えない。

「こと」の受け取り手を意識して話術を尊重したのは「語り」である。「物語」だし、「軍記物」である。

日本の随筆は、「眼」と「ことば」を重視する。つまり「観察」と「表現」である。両者の間には、当然「受信機」たる「感覚」がある。

これらが三拍子そろった随筆が、わざとらしいこしらえた手技も見えず、思わず「うまいっ」と膝を打つような作である。ここに至る修練は無限に続くと言えるだろう。

熟読玩味し甲斐のあるものの例を挙げれば、『寺田寅彦随筆集』1（岩波文庫）中の「どんぐり」とか、岩本素白『素湯のような話―お菓子に散歩に骨董屋―』（ちくま文庫）中の「京の尼」、武田百合子『ことばの食卓』（ちくま文庫）中の「枇杷」、丸谷才一『袖のボタン』（朝日文庫）中の「モノノアハレ」等である。

今回の作品の中で、家族、家庭をモチーフにするものに私はとりわけ心惹かれた。もちろんそこにはそれぞれの時代や生活環境といったファクターの違いが加わる。が、家族の後ろ姿や手つきを胸を痛めて愛惜するという共通点があった。興味を引いた作品を挙げたい。

清水文子「オパールの指輪」は、戦争、その果ての原爆投下が一家族をどう翻弄するかが描かれている。一つの短編小説を読むようなすぐれて構成的な仕上がりである。用字に気になるところを見受ける。

家森澄子「足跡」は、両親を亡くした後、親戚の養女となった妹を描く。どちらが幸か不幸かともいえない環境の中で、姉妹の心情は涙なくして読むことが出来ない。雪上の足跡、郵便受けの差し入れ等々装置も適切である。

生野花「道化師になれぬなら」は、「愛されているんだな、お前は。でも、俺も愛しているんだぞ」という恋人の言葉に象徴されるように、「私」は自らの無力感故に自嘲に陥る。もどかしいジレンマがよく出ている。

岡野真弓「パキスタンの乾いた風」は、医療援助で見聞したパキスタンの女たちの情況を淡々と描く。海外援助とは金と「もの」にとどまらないことを痛感させてくれる。末尾の「まとめ」の表現は形式的に見えてしまうので不要だろう。

竹澤一晃「小さな運び屋」は、終戦後の闇米運びの経験を淡々と描く。「私」の心境やその変化は感じられるものの「母」の描写がやや平板。

宮川行志「おふくろの指文字」は、終戦後初の総選挙の状況である。それは婦人参政権が付与された記念すべき選挙でもあった。広く全国的に筆者の母のような思いをした者も少なくなかったろう、と貴重な証言と感じる。

山崎人功「柿の味」は、まさに人生のキャリアを積んだ滋味深い作品である。末尾に登場する「母」はやや重く、唐突。さっぱりと終結する方が望ましかった。

武藤蓑子「祖母の織った半幅帯」は、祖母の人柄、殊に晩年の姿の表現が優れている。が、題名にもなっている機織り、半幅帯そのものがかすんでしまっている。

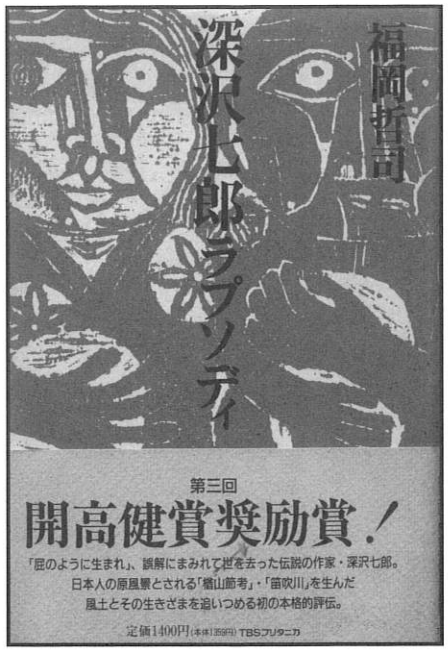
中村行寿「父の辛子漬け」は、ナスの辛子漬けが導き出す「父」の追想である。「まとめ」をつけようとする意識が強すぎないのがよい。

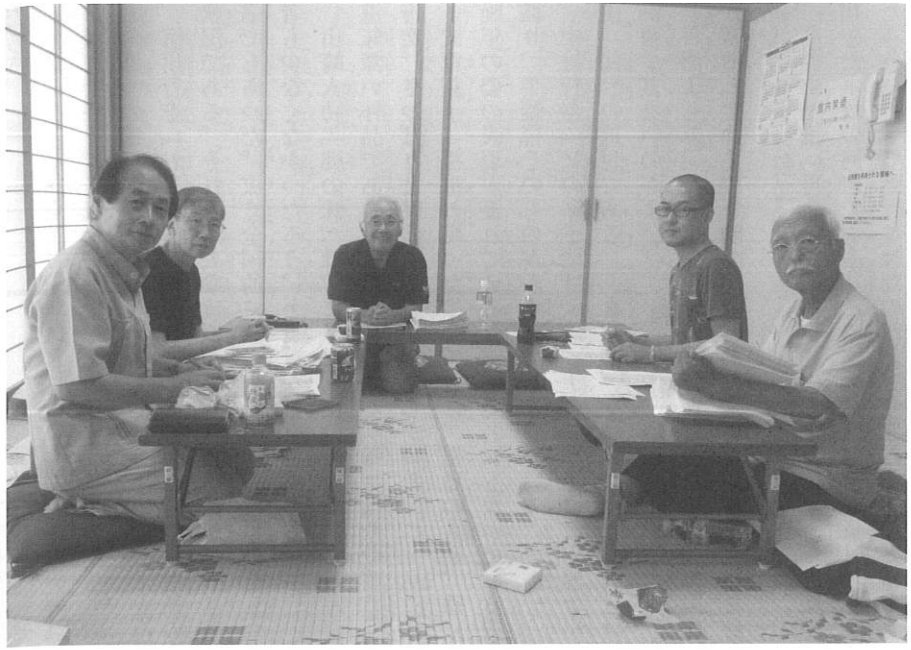
日沼よしみ「長谷川先生」は、好きだった小学校の担任が落薄してゆく姿を胸の痛みと共に描いている。共感を持ちやすい。

高橋由紀雄「再会」は、縮小、合理化の始まった炭鉱で起きた事故の回想である。この国の高度経済成長はこうした非条理の下で強行されたのだと、今さらながら実感する。

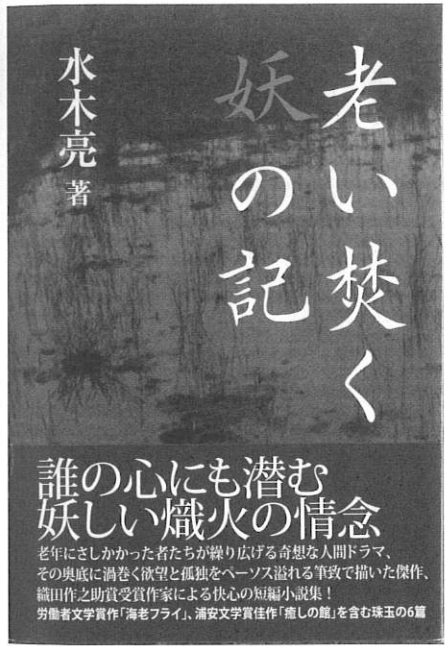
高原万里子「続私の『松川事件』」は、「事件」から六十年目に掘りだした父の「マスターキー」。父の志、事態への関わり、一生の決意を誰も理解することはなかった。「事件」の中にいた人の関係者による証言の尊さは、表現の粗さをも超越している。

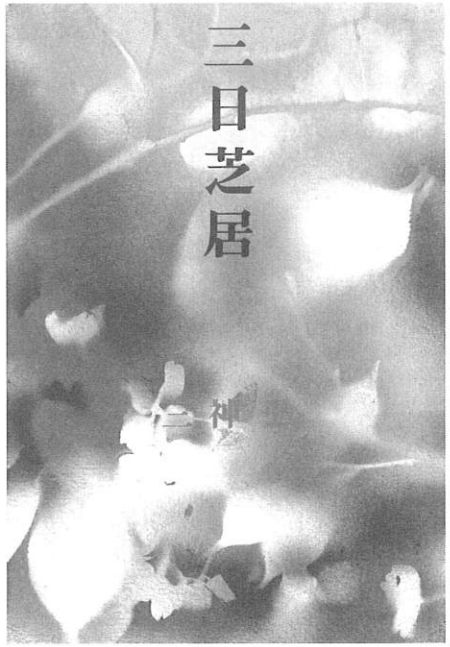
竹中水前「タイヤ検死官」は、標題に驚き、読んで、このような仕事のあることに、また、驚いた。諸先進国との「競争」に打ち克つために、この国は個々のビジネスマンを「戦士」に駆り立てた。最近の痛ましい事件を見ると、今も事情は変わっていないと見える。様々に思うところのある文章だった。





選考会風景





オパールの指輪

清水文子

母が再婚したので、広島の伯母さんがお祝いに訪ねて来た。

だが、いつもと違う。その左薬指に、オパールの指輪がなかった。伯母の小さな手に不釣り合いなほど大きいオパールの指輪は、キラキラと輝いていつも存在を主張していた。

小学六年生のわたしは不思議に思い、「指輪は？」とたずねた。すると、テーブルの下で、母が膝をつねった。聞いてはいけないことだったのだ。

あとで母は、「気が利かない子ね」となじった。

「指輪がないということは、生活のために売ってしまったのかもしれない。原爆で何もかもなくしたんだから。そのくらいわかってあげなくてはね」と、叱られた。とんでもないことを言ってしまった。伯母の心を踏みにじった思いがして、自分が嫌になった。

わたしが三歳の二月、父は肺病で、終戦を待たずに亡くなった。八月には広島にピカドンが落ちた。祖父は塩おにぎりを何個も握って貰い、焼け野原の広島へ身内を探しに行った。三日間、焦土をさまよったが、だれひとり見つけることはできなかった。

諦めて帰ってきたその日に、ぼろ布をまとった伯母一家が、この三次（みよし）盆地に避難してきた。幽霊のような三人に、幼いわたしはおびえたという。普段なら広島から二時間半

で着く芸備線だが、被災した人たちで超満員のため、半日以上もかかってたどり着いたのだ。祖母の兄に当たる大伯父とその娘の伯母、婿の伯父の三人だ。

大伯父たちは、爆心地近くで宝石店を手広く営んでいたが、すべて焼け焦げ、身一つで逃げてきた。伯母の指に光っているオパールの指輪だけが場違いだった。

家族は奇跡を喜び合い、手厚く三人を看護した。とくに伯母は額と脛に裂傷を負っていて、そこにウジが湧いている。あとからあとから発生するのだ。それを朝夕、幼いわたしは、覚えたての割り箸を手に、ゆっくりゆっくり捕ってあげる。それがわたしのお気に入りの仕事だった。額の傷は、ちょうど「旗本退屈男」の三日月型の傷と同じ位置にあった。

ジャムの空き瓶に水を張り、割り箸で虫を掴んでは水に落としていく。ゲームのようでおもしろかった。ウジ虫は身をくねらせているが、やがて静かになる。

その傷口の臭いは強烈で、家族の食欲は萎えたが、次第に慣れた。

風がそよとも吹かぬフライパンの底のように暑い盆地町で、三人は体力を奪われ、最も元気に見えた伯父が、しんどいと言い出し、ネジが切れたように亡くなった。

「次は伯母さんかもしれんから、よく看てあげんとね」

母と祖母がつぶやくほど、原爆の後遺症は怖ろしかった。母たち働き手の女たちは、もんぺ姿に割烹着をまとい、婦人会のたすきを斜めに掛けて、連日広島から運ばれてくる瀕死の被爆者の看病に追われた。

「水を～、水を～」と頼まれても飲ませてはいけないと止められていたが、『この人はもう助からない……』と思われる人には、こっそりと末期の水を飲ませてあげたと言う。手を合わせながらこと切れた人たちの姿を忘れることは出来ない、と母はよく独り言を言った。

秋口になり、皆の祈りが通じたのか、伯母の傷口もふさがり、ウジ虫とも縁が切れた。ふっくらと優しい顔をした伯母の指には、いつも大きなオパールの指輪が光っている。

「見せて」

元気になった伯母にせがんで、わたしはよく指輪を持たせて貰い、妖しい光に輝くオパールを覗き込んだ。石を動かすと、その角度によって、淡い萌葱色と黄色、ブルー、ピンクなどの色が複雑にきらめきあって、夢の世界に吸い込まれる。心まで持って行かれてしまいそうだ。無彩色の戦後に唯一、光を放つ存在だった。

「よっぽど好きなんじゃね。よぉし、文ちゃんがお嫁に行くときにプレゼントしちゃおう」伯母と指切りげんまんをした。

原爆で皆がうちひしがれている晩秋に、追い打ちを掛けるように町を洪水が襲った。わたしは伯母に馴染んで一階

の和室でいっしょに寝ていたが、「大水じゃー」と言う近所の人の叫び声とともに、横抱きに抱えられ、二階へと駆け上がったのを憶えている。

隣町に住む母方の叔父が、一面、川になった町に、木の葉舟を漕いでやってきた。炊きたてのおひつに入ったご飯と味噌汁を二階の大窓から届けてくれる。馬や牛が啼きながら流されてくるのを、隣家の大屋根に陣取ったおじさんたちが、鍬を片手に引き上げようとする。なんと、屋根の上には助けられた牛馬が、三、四頭身を寄せ合っているのである。「モォー」「ヒヒーン」、その光景は、幼い子にとって童話の世界のように珍しく、楽しい出来事として、脳裏にしっかりと刻まれた。

大水は一昼夜引かず、一階の天井すれすれに茶色の線を印して終わった。

大伯父と伯母は、しばらく静養して、瀬戸内海に面して建てられた簡素な公営住宅に入った。掘ると貝殻が出てくる埋立地に並んだ家々は、大きな墓石群にも思えた。わたしは祖母のお供で、たびたびそこを訪れた。祖母は兄である大伯父の具合が悪いので、食糧品などを持って往復五、六時間かけて出かけて行くのだ。わたしのリュックにも米や野菜が入っていた。

オパールの指輪が伯母の指から姿を消したのは、この頃のことだと思う。

「父さんの看病であんたも大変じゃろうよ。がんばりんさいのぅ」

祖母はつぶやき、毎回そっと包んだものを、姪の伯母の手に握らせた。

大伯父が胃がんで亡くなったのは、それからすぐのことで、終戦から九年目だった。五年目には祖父が食道ガンで旅立っている。二人とも原爆のせいで亡くなったと思う。大伯父を見送り、伯母は近くの小料理屋へ勤め始め、慣れぬ手つきで、煙草も吸うようになった。紅い口紅をきれいに塗った伯母は、なんだかオシャレになって、若返った。

「水商売なんて」と母は眉をひそめた。けれど、祖母はささやく。

「資格もなにもない中年の女の人が一人で生きていくのはしんどいことなんよ」

母は初婚の人と再婚し、父が養子縁組で家に入ってくれたので、名前も変わらず、母もわたしも確かに恵まれていると思った。心の中で、伯母に同情した。

五、六年たって、伯母は店へ通ってくる男やもめの人に求婚された。

伯母と同じに原爆で連れ合いを失った人で、大学生の娘が一人いるそうだ。

祖母はそのことの報告を受けた時、ほんとうにうれしそ

うだった。伯母もきれいなアルトの声で、ホホホ…、ホホホホ……と、さえずるように何度も笑っていた。

「これでやっとあんたも落ち着くねえ。私も安心してあの世に行けるよ」

祖母はその言葉の通り、ふだん元気だったのに、風邪をこじらせて二ヵ月ほど寝込み、あっけなく天国へ旅立った。

祖母の新盆に伯母は義理の娘を連れて、墓参りにやってきた。娘はわたしより二つ年上で、広島大学に通っているという。聡明で柔らかなまなざしをした人だ。

「家族ができてうれしいんです」

娘さんは伯母と顔を見合わせ、晴れ晴れと笑った。

伯母の左手の薬指には、一文字の結婚指輪がつつましやかに光っている。今度こそ幸せになってね、と、わたしまで笑顔になった。

東京の短大に進んだわたしは、そのまま当地で結婚し、伯母との付き合いも、長い間、年賀状だけになっていた。

伯母は二十年近く夫と暮らし、義理の娘も嫁に出した。夫を見送ったあと、しばらくして原爆老人ホームへ入ったという。娘は、泣いて反対したけれど、伯母の意思は固かった。「子どもの幸せをじゃましたくないもんね」伯母らしいと、わたしは思った。

それから十年ほど経って、伯母は原爆記念病院に入院した。長くは持たないらしい。見舞いに行った母から、伯母が「一目でいいから文ちゃんに会いたい」と言っていることを聞いて、矢も楯もたまらず会いに行くことにした。幸い、二人の子も大学生になって、手も離れていた。帰省の前に広島の病院に向かい、病室を訪ねた。

伯母は一回りも二回りも小さく縮こまっていた。病室に入ってきた中年女性に戸惑った風だったが、すぐにわたし、と認識してくれ、手を取るとしばらく離さなかった。

「ほうける前に言っときたいことがあってね」

伯母は息を継ぎ、わたしの顔を凝視した。

「約束したよね。オパールの指輪あげるって。でも売ってしもうてね。貯金して同じもん買うて、プレゼントしようとしたんじゃけど、娘が病気したり、孫が私立に入ったりして……。　約束破ってごめんね、ずっと気になっとんたんよ」

「そんなすごーく前のこと、忘れてしもうたわ」わたしも方言に返っている。

けれど、言葉とは裏腹に、伯母が半世紀近くも前の約束を憶えていてくれたことに、驚きもし、感動もしていた。伯母は涙目をしばたたかせながら言った。

「わたしの恩人よ。こまい手で一生懸命にウジを捕ってくれて、ありがとうね」

伯母は薄くなった前髪をかきあげ、額の傷痕を広げて見せた。三日月型のケロイドは、細くなって縮みジワが寄っている。

「きれいに直っとるねぇ。このぶんなら、また嫁に行けるわ」と、からかうと、

「もういい。もう二回もしたから」と、一瞬、伯母は真顔になって言った。

義理の娘は毎日パートの帰りに立ち寄ってくれるという。きっと伯母の再婚は幸せであったのであろう。

ふと、あのオパールの指輪はいま、だれの指を飾っているかしら、と思った。なにしろ、あの原爆を生き抜いた強靭な力を秘めている指輪なのだから。

清水 文子

しみず　ふみこ

1942　広島県三次市に生まれる
女子美術短大で建築デザイン専攻
広告会社でコピーライターとして勤務
結婚後はフリーライターのかたわら、児童画教室主宰、建築コーディネーターとして働く

受賞の言葉

清水文子

明け方に『虎』の夢を見ました。布団がモゾモゾするのではがして見ると、何と一匹の虎が腹ばいの姿勢で、寄り添っているではありませんか。目が合った虎は、顔をなめようとしました。

「わぁ～」、わたしはベッドから転げ落ちてしまったのです。瞬間、ベッドのフレームでしたたかに脇腹を強打し、痛さに床でしばらくうずくまったままでした。

結果は肋骨一本損傷。あまりにも虎がリアルだったので、パソコンの夢占いをのぞいてみました。

『虎の夢は大変好いことが起きる前兆。宝くじには当たるし、懸賞にも当選するので、チャレンジしなさい』……夢は正夢になりました！

わたしのつたない作品を見い出してくださって本当にありがとうございます。亡き父が名付けてくれた『文』の道を歩いて行こうと思います。

第10回 文芸思潮 エッセイ賞 最優秀賞

Essay

脚を創ろう

印南房吉

iPS細胞やらSTAP細胞やらと人間の細胞を自在に育成形成出来るような話が新聞に載るたびに、医学の進歩は凄いなと思う。この分なら失った脚を取り戻せるのかな、と楽しい期待が湧いてくる。マテマテ、世の中そんなに甘かあないぞとも思う。

二十四才の秋、乗り組んでいた貨物船でどしゃ降りの雨の中、滑って転んでロープの輪の中に左脚を突っ込んで仕舞った。あいにく接岸中、ギリギリとウインチに捲き込まれアッともがいたが、外れず、バッキーンと骨が砕けた。その音は自分の絶叫と共に今でも身体の中を走る時がある。サイレン・救急車・手術台・無影灯の光りの下で切断した。

深夜、ジンジンと麻酔が醒めてくるにつれ、全身を貫く疼痛と共に様々な言葉が浮かんだ。

「雨さえなかったら……」「アイツがウインチを止めてくれりゃな」から、ついに「こんな船に乗らなきゃよかったのに」となってハッと気付いた、自分が選んだ道だった。

戦後間もなくの混乱期、全ての価値観が転倒し、食糧難で毎日腹を空かしていたのも重なって、せっかく入って勉強し始めたK工大を飛び出してこの船に乗り、世界一周を目指したのである。造船技師になって空飛ぶ潜水艦を造る夢を捨てた報いか——。イヤ夢はもういい、今さら人を謗り、天を恨んでも脚は生えない。明日からどうやってメシを喰うか、何から始めればいいのか、出発点を探し始めた。

最初に鉄脚が浮かんだ。上野公園を繋がって歩いていた白衣の三人組、ニョキッと突き出した真っ黒な鉄の脚、ガッチャン、ガッチャンと一歩ずつ鳴っていたっけ。あれを俺が穿くのかよ。どうもこうもないな、白く塗るか？厭だな——ちょっと悲しくなった。待てよ、その前にしなきゃならんことがあるぞ、ベッドから出て歩くには松葉杖を突く、突くには腕力がいる。「よしっ」とベッドでリハビリを始めた。ベッドの足許側の桟に22㎝のロープを通し、これを両手で手繰って身体を起こす。腕力・腹筋・大腿筋を同時に鍛えるのである。

「おりゃー、一・二・三・四……よいしょ！」

ベッドを軋ませながら十二回、一日三度、力一杯始めた。二日目に隣の患者さんが逃げ出した。私の声と顔が怖いとか。看護師さんが私のリハビリを注進したらしい。夕方ふらりと院長が見に来て

「いいぞ、頑張れよ、海の男！」とエールを送ってくれた。腹にずんと来た励ましだった。

二週間後、何とか松葉杖で病院内を動けるようになったら、院長が自分の後輩の高橋先生がいるK病院に転院するよう手配をしてくれた。

「本院は卒業！　ヨーソローだ」

玄関で笑顔でいつまでも手を振って送ってくれた。頭に焼き付いた。

K病院は湯河原と熱海の境を流れる清流藤木川沿いにあった。破風造りの玄関に向かって白い橋を松葉杖でコツコツと歩きながら、「帰りは颯爽と歩けるさ」と頭の中で呟いてみた。十国峠が青々と光った。

案内された一〇二号室は十畳二間の続き部屋、片側に大机、隻腕・隻脚の六人がそれぞれの格好で何やらやっていた。一人が手を挙げて「おー、よろしくな」と声を掛けてくれた。見ると私と同じ様に切断した脚の断端を餅つきの要領で座布団をトントン叩いている。何かと思ったら、

「こうすりゃ固くなって義足にいいさ」と事もなげに言った。S鉄道で貨物車に挟まれたんだと笑った。もう一人は片腕だけで腕立てをスイスイやっていた。

「俺は一本で二本分」と笑った。暗さや惨めさなど微塵もない。加藤院長がなぜこの病院を推挙してくれたのか朧げながらわかった。ここは病院ではなく、人間再起の訓練所だった。

翌朝、初診の高橋先生に、どうしても頭から捨て切れなかった脚の移植を申し出た。心臓・腎臓でさえできるんだ、よく切り落とした指をくっ付けた話も聞いた、ならば脚はどうか？

先生はしばらく私の顔とカルテに綴じこんだ加藤院長の手紙を見ていたが、

「ウム、真剣だな……」「……しかし、残念だが僕にはできない」「君の脚は三十六片に砕けていたそうだ」

先生は私の目を見つめてきた。

「義足で、どうかね」

そして続けて言った。

「魚は泳ぐ、鳥は飛ぶ……君はどうする」

瞬間、それがなんだと頭を掠めたが、ハッと目が醒めた。

高橋先生は私の不安がこれからの人生だと見抜いておられたのだった。「魚は泳ぐ、鳥は飛ぶ」は名言のように胸に突き刺さってきた。「――人間は歩く」

「人間歩けば何とか生きられるんだ。生きるためにはまず歩こうよ」と、傍らの白い看護師さんに頷いた。看護師さんはパッと出て、すぐ作りかけの義足を抱いて来た。ジュラルミンの胴体がキラリと光った。先生は受け取るとスッと私に差し出した。意外に軽かった。

「これが最新の義足だ。充分とは思わないが、自分の脚の断端を上から挿し込んでベルトすれば何とか歩ける」と、手を添えてやってみせてくれた。断端とジュラルミンの胴体を合わせるのがひと仕事さと頷いた。

即日採型し、一週間後に私の義足ができた。

先生と技工士さんの前で断端をスッと挿し込みサッと立った途端に激痛が脳天を突き上げた。

「痛いのは当り前、生きてる証拠」お二方ともニコリともしない。当たって痛い部分を少しずつ叩いて膨らませるうちに合って来るさと技工士さん。皆そうやってるんだとのこと。「痛いほど早く歩けるようになるさ」

聞いているうちに猛然と闘志が湧いてきた。ならば、と翌日から昼食もそこそこに病院裏の細い山道を二時間強引に登って小さい見晴台に到着、十分間休憩、来た道を下る。一歩ごとに凄まじい疼痛、ナーニ痛いほど早く歩けるんさと心に唱えながらの訓練を始めた。

病院に帰着するなり技工室に直行して、尖りハンマーで当たり所を内側からコツコツ叩いて膨らませる。一週間で合うはずが、傷になつて駄目。歯を食いしばって二週間、やはり駄目。

いつも傷の手当てをしてくれる例の白い看護師マッチャンが「変ね、この傷。いつも同じ所に、同じ向きにできるのね」と首を傾けた。――ハッとした。今日も歩きながら気になっていたことだ。ヤッパリだなと頷けた。機械工学の初歩である。毎夜これからの生きる道と、昔の勉強を始めたことがここで生き返った。一言で言うなら応力の集中である。応力を分散すれば、つまりさらに広い面積で荷重の方向を分散すれば、傷は防げるはずである。一夜かかってどうすればいいか、スケッチ図を描き続けた。明け方近くダブル足関節の構想が浮かんだ。現在無関節の足部に横ピン関節と緩衝板を装着し設置から踏み切り間に受ける荷重を受ければ傷ができにくくなるはずだというアイデアである。緩衝材は穿いてから決めればよい。歩行の円滑化も期待できる。――これはいいぞ、一石三鳥だ。サッと纏めて朝一番、高橋先生の机に押し掛けた。とくとくと説明し始めたら、先生が、

「ちょっと待て。技工の清水君を呼んで来て」とマッチャンに声を掛け「それにしてもナンデこんな図面が描けるんだ」と私に言った。K工大で造船の勉強をしていたことを話すと「なんだ、そうか、どうりで。こりゃあいい」と深く頷いた。マッチャンとも四人で検討会を始めて直ぐ一本作って穿こうということになり、一週間後にできた。わくわくしながら穿いた。歩いた、スイスイ歩ける。「万歳！」四人ともニッコリ笑った。

私は楽に歩けるのが無性に嬉しく裏山の見晴台をさらに奥へと辿った。

見えた！　水平線、青い弧を描く水平線の向こうはさらに大洋に続く海だ。かつて目指した道である。もう一度チャレンジしよう。失った片脚は創った義足でいい。自分で創ったんだからな。夜間、病院の好意で借りた事務室での勉強に打ち込んだ。これで生きるんだと腹が固まった。

二カ月後、予備の義足一本を抱えて川崎駅の雑踏に揉まれていた。人間がうねって昇る広い階段、私も負けじと力一杯歩いた。歩けた。そのままハローワークに直行した。

運と人に恵まれ、E社に就職し、機械設計の道を歩いた。

高橋先生は立派な人だった。新しい足関節の有効性を数値的に把握しようと新義足装着前後の基礎代謝率の研究を独自に進められ、目的を果たされた。私は三十年後、独立して介護機器の開発を行なっている。

高橋先生の一言、《「魚は泳ぎ、鳥は飛ぶ」――僕は義足で生きていく》……先生、やっていますよ。

受賞の言葉

印南房吉

東京浅草に生まれ空襲で焼き出されたのが十六歳、以後漂泊して二十四歳の時、船上事故で左脚喪失、様々の喜怒哀楽を体感し同時に周囲の支えのありがたさを痛感して六十年経った。

この十年、毎年「文芸思潮」のエッセイに入選し続けるのが生き甲斐だった。十回目の今年、ワクワクと封を切ったら「最優秀賞」……素晴らしい！　――父母の生地、銚子の犬吠埼に立った時の感激。一望太平洋、水平線が大きく弧を描き輝いている。そして父母の笑顔――世の中にはこんな良いこともあるんだと、何度も心に頷いた。

ここでまたヤル気を起こし、今ネタキリさん用のホットミストシャワー＋ハイドロマッサージャーを考えている。何気なく友人の一人の野木に話したら、途端に「一号機、俺が買った」と叫んで決まり。

何が何でもヤラナキャ。新しい生き甲斐である。

印南房吉

いんなみ　ふさきち
1929年　東京浅草生まれ
機械設計技師
現在、独立して個人で老人用の介護機械設計製造を行なっている

タイヤ検死官

竹中水前

北ロシアの凍てついた鉄鉱山で使われ、生命が終わったジャイアントタイヤは、現場の片隅に無造作に棄てられていた。タイヤに被った雪を払い、一本一本の状態を検査しながら、そのあまりにも憐れな姿に思いがこみ上げた。

「まだこんな使い方をしているのか。これじゃタイヤは死んでも死にきれないだろう」

私は既に現役を退き、現在は商社の技術顧問としてタイヤビジネスに関わっている。だが元はタイヤメーカーの技術屋であり、冬のシベリアの零下45℃の世界から夏は60℃にもなるサハラ砂漠まで、あらゆるタイヤの生き様、死に様を見て来た。

今から四十年前のことになるが、サハラ砂漠のど真ん中に石油や天然ガスの基地があり、そこへ人や物資を運ぶために大型のトラックが走っていた。装着されていたタイヤは全てフランスのミシュラン製であった。他のブランドはその過酷な使用条件に耐えられず使い物にならなかった。そんなマーケットに日本のブリヂストンは進攻をかけたのである。

サハラで使えるタイヤを開発するには、現場での使われ方を調査すると同時に、そこでタイヤがいかに走り、いかに生命を終えたのかを知ることが重要である。それが技術や商品の開発へのヒントになる。走行中に故障したタイヤはサハラの中に棄て去られている。私はそんなタイヤを探し求めて灼熱の砂漠の中を彷徨った。見渡す限りの黄色い砂が熱風に翻弄されてうねっている。その中にポツンと黒点が見えると「あったぞ」と叫びながら近寄る。サソリに

注意をしながら、聴診器を使うように測定器具をタイヤにあてて、全周をくまなく点検する。ミシュランタイヤとブリヂストンの明らかな違いが見つかるまで。

苦しい仕事ではあったが、ミシュランに勝つタイヤにするためにはやらねばならない闘いであり、それ以上に、この世に最高のものを生み出したいという技術屋としての夢でもあった。そのデータを東京へ送信する。そうしてブリヂストンは先行のミシュランに対抗できる商品を作り上げてきた。

しかしそうやって作り上げた強靭なタイヤであっても、使い方を間違えれば故障してしまう。苦労して入手したデータを持って顧客を丹念に訪問し、正しい使用方法を説明するのもまた大切な仕事であった。

これが私の生涯をかけた天職になろうとは……その時は思いもしなかった。

近年の目を瞠(みは)るばかりの中国の急成長は天然資源需要の急増を招き、世界は資源ブームに沸いた。資源国や資源メジャーは増産に追われ、より多く、より速く鉱産物を運ぶために、鉱山で使用されるダンプトラックは巨大、高速、高馬力へと進化していった。そして積載能力が二〇〇トン、三〇〇トン級の超大型車輌が鉱山内を走り回るようになった。進化する鉱山車輌に装着されるタイヤもまた、直径三M以上、一本の重さが三トンを超えるものとなった。そしてそのタイヤには耐久性向上のための新技術開発が必要とされ、世界のほとんどのメーカーはこの流れについていけなかった。結局超大型タイヤ開発戦争に生き残ったのは日本のブリヂストンとフランスのミシュランだけとなってしまった。

そんな資源ブームのさ中に私はロシアの鉱山を訪問し、そこで驚愕の実態を見た。使い終わったタイヤはまるで共同墓地の無縁仏のように鉱山の片隅に雑然と廃棄されていた。その姿を見れば使い方に問題があることは一目瞭然であった。

私はダンプトラックが走行している現場に急ぎ赴いた。すり鉢状の露天掘り鉱山の底で鉄鉱石が採掘されている。採掘された鉱石を超大型ショベルがすくい上げ、待機しているダンプトラックの荷台に落とし込む。危険だからあまり近づけないが、巨大マシーン同士のからみは迫力満点である。一回の積み込み量が七、八十トンに及ぶから、落とし込むときにはドーンと爆弾が炸裂するような音を立てる。荷台が一杯になれば積み込みが終了し、ダンプは鉱石を砕く装置のある場所へ向かって発進する。

その時である。後輪タイヤが大きな鉱石に乗り上げたのだ。総重量四〇〇トンに及ぶ積載された状態でのダンプの巨大な荷重が、突然一本のタイヤの一点に集中したのだ。新技術が搭載され耐久性が格段に向上した強靭なタイヤで

あっても、そうなればひとたまりもない。バーンと耳を劈くような音とともにタイヤが破裂してしまった。一本数百万円するジャイアントタイヤが一瞬でその命を終えたのだ。

怒りをこらえて鉱山マネージャーの所に駆けつけ、ダンプの走行路面の整備とドライバーの慎重運転の指導を強く申し入れた。

しかしマネージャーはしらっとして、

「トップの指示は、とにかく鉱石の増産が最優先、だからタイヤにやさしい使い方などできないのさ」とそっけない。

そんな異常な状況は他のどの鉱山でも全く同様であった。

ところが……二〇一三年より事態は急変し、急激な成長を続けてきた中国経済がスローダウンの局面に入った。既に巨大となった中国経済の成長率がわずかでも下がれば、世界は震えあがる。資源業界は増産一辺倒から一気に減産モードに変わった。各資源メジャーのトップは減産による収益減への対策としてコストカット最優先を打ち出し、鉱山用ジャイアントタイヤもその対象となった。

その様な環境激変の二〇一三年十二月、私は再度北ロシア鉱山へ出張した。目的はタイヤにかかわるコストをどう削減させるか、云い換えれば、どうしたらもっとタイヤを長持ちさせることができるかを検討し、鉱山側へアドバイスすることである。

私は再び共同墓地の様なタイヤ廃棄場へ赴いた。あの時と同じようにタイヤは無造作に棄てられ雪に埋もれていた。しかし鉱山側の態度は当時とは異なり、何とかしたい、どうしたらよいか、と私の作業を真剣に見ている。

北ロシアの凍り付いた現場であろうが、アフリカの灼熱の地であろうが、私のやることは同じである。一本一本のタイヤを入念にチェックする。ほとんどのタイヤは以前同様のみじめな姿をしている。

タイヤの破損で最も多いケースは、やはり鋭く尖って硬い鉱石に乗り上げ、ばっさりと切れてしまうことだ。一方、スピードの出し過ぎでタイヤが異常に熱を持って故障してしまう現象も目立った。鉱山用ジャイアントタイヤはぶ厚いゴムで覆われている。だから気温零下の現場であっても、オーバースピードはタイヤ温度を100℃以上に上昇させ、高熱によって内部組織を破壊させるのだ。

そのような故障からタイヤを守るにはどうすればよいか？　それは走行路面の整備やダンプドライバーの教育などを徹底することである。極めて当たり前のことだが、これらがまさにタイヤを長持ちさせ鉱山側のコストを削減させるための方策なのだ。

タイヤの踏面部はトレッドと呼ばれ、そこには溝が掘ってあり、走行するに従ってこれがなくなってくる。正しく

使用されれば、タイヤは溝が完全になくなるまで働き、その使命を終える。しかしそんなタイヤは、溝はなくなっても、スチールで出来た内部の骨格はまだしっかりしているケースが多い。それを見つけるのは苦しい作業の中の楽しみでもあり、新たな希望も湧いてくる。なぜならば踏面部に新ゴムを貼り、溝をつけることでタイヤは生き返り、もう一度働くことが可能なのだ。これをリトレッドと云う。

まだまだ世界中の大多数の顧客が、値段の高いジャイアントタイヤを無駄使いしている。地球上の天然資源は無尽蔵ではない。我々のまわりにあるほとんどの物資は天然資源から作られている。タイヤもまたしかり。無駄にはできない。

リトレッドして再生させる、あるいはリサイクルする。そのためには技術開発が必要であり、この努力は有限な資源を使わせていただく人間の義務であろう。そしてそこに技術立国日本の再生があると信じる。

私は現役を退いた今でも、こうしてタイヤの検査をする度に「何とかしなければ」とため息をつきながら現場をあとにする。

二月に東京に大雪が降った。やむ気配もなく降り続いている雪を見ながら、あのロシアの雪に埋もれたタイヤを思い出した。今頃どうしているだろうか。

竹中水前

たけなか　すいぜん
1947　熊本県生まれ
65　（株）ブリヂストンに入社
入社後、働きながら70年、日本大学理工学部夜間部を卒業
ブリヂストンに勤務中、海外技術サービスの職務でレバノン、エジプト、イギリス、フランス、西ドイツ（現ドイツ）、ベルギーに駐在
その後、オーストラリア、南アフリカで現地法人の代表取締役社長を歴任　以上計8ヶ国、23年間の海外駐在を経験し、62歳で同社を退職
現在、三井物産パッケージング株式会社にて技術顧問として在職中

受賞の言葉　竹中水前

別に社会を敵にまわしているわけではありませんが、今回「社会批評賞」という重い名前の賞を頂戴し、大変ありがたく思っております。前回は三年前に応募し入選賞を戴きました。今回は何とかそれ以上の賞を取りたいと思い、神田の文藝学校に通って八覚先生、塩見先生のご指導を仰ぎながら、自分としましては渾身の力を込めた作品を提出しました。長年自分の生業としてきたタイヤという商品をテーマにしたエッセイですので、その時々に訪れた国や出会った人達を懐かしく思い出しながら書きました。

パキスタンの乾いた風

岡野真弓

ある日、電車の中で、

「十三歳で結婚。十四歳で出産。恋は、まだ知らない」

という海外女子援助の活動をしている国際NGOのポスターを見た。

十代前半と思われる少女は、美しい色の衣装に身を包み、金の装飾品で額と細い首、両手首を飾っていた。婚礼衣装だろうに、彼女の表情は、気の進まないことに向かうかのように、諦めと悲しみを訴えているようだった。

その写真とキャッチコピーに、周りを忘れて、見入った。それほどに吸引力のあるポスターだった。次第に、私の中には、かすかないらだちをも含んだ落ちつかなさが、湧き上がってきた。

一九九九年から二〇〇八年までに、パキスタンで出会った少女たち、そして若い女性たちのことが、ぽつぽつと降る雨のよう、心の中に思い出されてきた。

医療援助の仕事のため、一九九九年五月、パキスタンのラホールに着いた。パキスタンの国語であるウルドゥー語を習う間は、何の仕事もできなかった。住まわせてもらっていた家の、下働きをしている少女たちと、片言で話すのがせいぜいだった。

その家には十代と思われる少女が二人住み込んでいた。給料を日本金に換算すると、ひどく安く思えた。しかし両国間でお金の価値が違うし、その土地では、十分なものらしかった。安心して住むことのできる部屋と定時収入があることは、ありがたいことのようだった。彼らは二人で一部屋を与えられていた。たくさんいる兄弟たちと一つの部屋に休むのに慣れているらしく、相部屋もごく、普通のことのようだった。

毎月、彼女の給料を受け取るために、長い白いひげを生やした老人が来た。十代の娘がいるようには見えないくらい、高齢に見えた。厳しい気候と、住環境、十分とは言い難い食生活に長期間耐えているためか、日本人より老けるのが早く、寿命が短いようだった。四十代でも七十代ぐらいに見えることもあったので、彼の本当の年齢はわからない。

実家には、養わなければならない弟妹がいるようだった。娘の給金が大切な生活費であったらしく、お金を受け取るためだけに月一回来る父親を、私は割り切れない気持ちを持って眺めていた。しかし彼女は、「父は体が悪くて、心配」と涙をためていた。母親の話を聞いた覚えがないので、もう亡くなっていたのかもしれない。

このように、働くのを決めるのは、父親または兄弟である。彼女に選択権はない。いつまで働くのか、決めるのも父親である。彼女の収入に頼っている父親が、いつ彼女の縁談に心を配るようになるのか、はたで見ている私は、疑心にかられた。

パキスタンでは子供を産める若い女性が望まれるようだった。父親が亡くなれば、実権は長兄に移る。未婚女性はひどく不安定な存在だ。彼女が年を取れば、結婚相手を得るのは難しくなる。貧しい家の娘にとって、家族のために働くのは、誇らしいようでありながらも、また彼女自身の枷になるように見えた。

その上、女性の結婚には多額の持参金が要求される。女性を受け入れるということは、一生、生活の面倒をみるということなのだから、経済的な補償を付与する、という意味のように見えた。持参金も大きな枷になっていた。

その後、働くようになった病院で出会った看護師たちも、同様の立場にあると感じた。彼女たちは病院内の寮に住み、給料は、実家の生活費、弟妹の学費、そして妹たちの持参金になっているとのことだった。

「資格のある自分が働いて、妹たちを結婚させてからでなくては、自分は結婚できない」というのを聞いたこともある。貧しい家庭に育てば、十年の初等教育を終える前に、働かざる得ないこともある。初等教育を受けなければ、看護師や教師などの専門教育を受ける機会は一生ない。だから、看護師になれた自分は幸運であり、弟妹を助けるのは当然の義務だという。しかしある看護師は、弟妹を結婚させるために援助を続け、婚期を逃してしまった。彼女が用意した持参金で妹は結婚したが、四十才を超えた彼女に縁談はなかった。両親の死後、実家の実権は弟がとった。病院の退職も近づき、彼女はひどく不安になった。

「皆のために頑張ったのに、これから自分はどうやって生

活していけばいいのだろう」と。

日本人の私が当然のこととして持っている、「両性の同権。女性の権利」という考え方は、そこでは通用しない。しかし、その文化と習慣の中での、「女性を家族の中で守る」強い力は、しばしば体験した。女性は弱い、一人では生活できない、導き、保護しなければ、という通念である。

このような文化に生まれ、育った看護師たちに聞くと、「夫を得、子供を持つ。それが一番の望み」という。彼らに、人を好きになる、という体験や、感情がない、というつもりは全くない。しかしそこには恋だ、なんだという余裕はない。飢えない、屋根がある、着るものがある、そして自分を守ってくれる家族、父親、夫、そして息子がいることが彼女たちのサバイバルの必須事項なのだ。

さて最初の家事手伝いの彼女も、「このまま、年取ったらどうしよう」と、心配するようになったころ、農家の男性と、縁組が決まった。彼女は、死ぬまで畑で働くことだろう。（連日の重労働と、多産。長い寿命は望めないかもしれない）と悲観的に眺めてしまう私をよそに、彼女の顔は輝いていた。家財道具を持参するのが花嫁の義務、とのことで、マグカップセットを贈った。その箱を大切そうに抱えた後ろ姿を思い出す。

ようやく縁づいても、男の子が産まれないと、離縁されることが、ままあるそうだ。なぜ女の子が嫌われるのか聞いてみたら、「育てても他家のものになってしまうから」と言われた。持参金を持たせなければならない。家の繁栄のためには、持参金を持ち、子供をどんどん産んでくれ、働いてくれる女性を娶（めと）れる男の子のほうが、ずっとうれしいそうだ。子供の数が多い、すなわち家族の力が増す、と考えるようだ。

さて一番初めの、ポスターだが、今までのことを考え合わせれば、とても乱暴な言い方であるのは、承知の上だが、以下のようにも考えられないだろうか。

十三歳で結婚できるのは、家族が縁組を探し、持参金を持たせることができたからであり、十四歳で子供に恵まれたのは幸運、とも言える。子供ができなければ、離婚される。収入のない女性を養っていく困難のため、家族は、彼女を再度結婚させようとする。自分で自分の人生を決められないなど、恋愛自由な国にいる者から見れば、信じられないような話かもしれない。しかしその国では、早く結婚し、子供に恵まれた女性を羨みこそすれ、かわいそうとはあまり思わないように思う。

私の働いていた病院には女医がいた。彼女たちも、医師になったのは、自分で選んだ、というより、家族に勧められたから、いい縁を得るために、とも聞いた。第一、娘に

どんな教育を授けるかは、父親の決めることだ。結婚した後は、夫の望むところで働くのだ。または働かない、という夫の決定に従うのだった。

もう一つ、女性がどのように見られているかを示す例を挙げたいと思う。私は、到着してすぐ、決して一人で外を歩かないように厳命された。女性が一人で歩く、ということが非常識だと言うのだ。「どうして」と聞いた私に、

「一人で歩いている女性は、家族に言えないようなことをしている、とみなされる」

とのことだった。だから一人でいる女性を見たら、悪心を起こしてもよい、いや、そう望んでいる、とみなされることさえある、とのだった。

これには閉口した。病院と看護学校とその寮をひとつの壁の中に抱き込む敷地は結構広いものだったが、ずっとその中にいるのは、ひどく息苦しかった。昼間は四十度を超える日が続き、涼しくなる夜に、敷地の中を散歩するのが、せいぜいの運動だった。敷地の外に出るときは、運転手つきの病院の車か、または誰かと一緒に出掛ける。大した過保護のようだが、これがこの国の習慣なのだ。

あのポスターを作った方々は、このような事情を、よく知っていたに違いない。しかしポスターを見た日本人たちの多くが、「かわいそう、人権無視だ」と感じたであろうことは、想像に難くない。本当に人の心をつかむ、うまいキャッチコピーだ。だからこそ、釈然としないものもある。教育の機会を得られない女性たちに、識字教育を、ということは、本当に素晴らしい働きである。私のいた病院にも付属の看護学校があり、授業料は取っていなかった。資格をもった卒業生たちが、故郷の村で人々に奉仕できるように、また家族に従って結婚したとしても、先の人生で、資格が自信となり、助けになることを願っていた。しかし娘を学校に行かせるかどうか決めるのも、卒業後の働く場も、家族に決定権があった。

他の国の事情は、その国に行ってみなければわからない。たとえ九年間住んだとはいえ、私は外国人で、垣間見ていただけだ。文化に取り込まれ、従わなければならなかったのはそこにいた間だけだった。だから私にもよくわかっていない部分が多くあるに違いない。

違う文化の中に入るとき、わからないことのほうが多い。「間違って理解しているかもしれない、思い込みかもしれない」と、一歩も二歩も引いていることを、忘れたくない。

受賞の言葉

岡野真弓

私の書いたものがこのように多くの方々に読んでいただける機会をいただけましたことを、大変うれしく、また光栄に思います。町で見かけた広告が、咽喉に刺さった骨のように気になる理由を考え、そこから思い出される出会いを辿りながら書きました。

私たちは一人一人ユニークな存在であり、その人であるからこそ見える社会の様々な面があると思います。そのような小さな気づきを発表し合う場を提供して下さる「文芸思潮」（アジア文化社）の皆様に感謝いたします。また中間発表における一次から三次の選考理由を拝見したとき、これだけ多くの作品が丁寧に読まれていると感じました。選考に当たられた先生方に深くお礼を申し上げます。

岡野真弓

おかの　まゆみ

1956年　東京生まれ
聖マリアンナ医科大学卒業
内科医として研修後
1999年から2008年まで聖ラファエル病院（パキスタン）で働く
帰国後、聖母病院（東京都新宿区）に勤務
マリアの宣教者フランシスコ修道会員

2800円（税込／送料共）
御注文はアジア文化社まで

Essay

第10回 文芸思潮 エッセイ賞 優秀賞

三十三年目の富士山

板東洋三郎

「今度友だちと富士山に登るのよ。私初めてなのでとても楽しみ」

特養で夕食の介助をしている私の隣のテーブルで、若い女性の職員が他の職員と話しているのが聞こえた。「富士山に登るのよ」その一言は、一瞬にして私の長年の思いに火をつけた。

仕事が一段落するのを待って、若い人ばかりのそのグループに参加させてもらえるかどうか尋ねた。年齢はどうしようもないことながら、私には二年ほど前に起こした急性心筋梗塞の既往症があることも話した。医師からはすでに許可をもらっていることも告げ、後日リーダーの看護師にも承諾してもらった。登山の二カ月ほど前のことである。

準備をし始めると、登山の実感がわいてきて、単純にうれしく心が弾む思いであった。最後にこんな気分になったのはいつごろだろうか。

富士山の姿が私の脳裏に刻まれたのは、横浜港を去る移住船の夕暮れの甲板であった。六十年代の学生運動に挫折した私は、大学を中退して、同じような境遇の若者たちが作った、ブラジルに「青年の村」を起こそうというグループに参加していた。短期間で資金を作る必要があった。そのために私たちは、日夜青梅街道や甲州街道を上下し、沿線の住宅街で廃品回収をした。

当時、移住者は家族単位でしか受け入れられなかった。独身者は現地での呼び寄せ人が必要であった。そのために私は、東京の練馬区にあった独身移住者の訓練所に入った。

そこは戦前戦後を通じて多くの移住者を中南米に送り出してお り、修了生には呼び寄せ人を紹介してくれたからだ。ブラジルの言語、文化や習慣、移住史などからなる六カ月の訓練を終えた私は、グループの先発として単身横浜港から日本を後にしようとしていた。

見送りに来た大勢の人々を岸壁に残し、もの悲しい汽笛とともに静かに船が動き出す。甲板で叫ぶ人々の声が静まり、手すりに絡んでいた色とりどりの紙テープも風にちぎられ波に消えていく。横浜港が夕暮れの水平線に飲み込まれて見えなくなると、不思議なことにそれまで気付かなかった富士山が、淡い夕陽を背にくっきりと見えた。あたかも家を去る子が見えなくなってもなお、背伸びをして見送る母親のように。私がこの目で見た最後の「日本」は富士山であった。間もなくそれも夕闇の水平線に消えて見えなくなり、私は船室に降りた。

パナマ運河経由で、四三日の船旅の後サントス港に着いた。私は、サン・パウロ州の奥地のコーヒー園で働きながら、「青年の村」の準備をし、後続隊を待った。一年余り後に八名全員が現地に集合し、希望に満ちた共同生活が始まるはずであった。

ところが、私の渡航後に結婚していたリーダーの顔がさえない。その夜の会合で彼の重い口から語られたのは、農場を買うために私たちが廃品回収をして貯めた資金が、彼の失策のために消えてしまったということだった。詳細の説明もなかった。このことは同船のメンバーにさえ語られていなかった。二年以上の労力を費やして進めてきた計画はあえなく水泡と帰してしまった。しかし、不思議なことに非難の応酬や、嘆きの言葉は誰の口からも語られなかった。それほど衝撃は深く大きかった。数日後には各自それぞれの方向に向かい、再び会うことはなかった。

それから二年余り後、あるきっかけから私は、サン・パウロ市内のある大学の神学部に入学した。卒業後、北米のワシントンに世界本部があった、あるキリスト教会の牧師として働くことになった。しかし日々接触する多くの人々が、健康の問題を抱えて苦しんでいる現実に驚いた。祈るほかに彼らの必要に応えることができないのが悔しかった。

三年後、私は牧師をやめた。グアテマラのアンチーグアにあった自然療法の医院で健康教育の研修を受けるためであった。世界の多くの国から若者たちが集まっていた。ベトナム戦争後で、薬物中毒を克服したい元兵士もいれば、反戦運動の名残りのヒッピーたちも多数いた。ピーター・ジェンフィのようにアフリカの部族の王子もいた。夜になると活火山の噴火が見え、毎日のように地が震えた。三歳の長男と二歳の長女がいた。次女はその地で授かった。

二年の研修は隣国ベリーズの健康教育センターで終った。ブラジルに帰国する旅費を作らなければならなかった。家

族をそこに残して陸路でメキシコを縦断し、徒歩でテキサス州に入り、夜行バスでロサンゼルスに移動した。数か月後、家族を迎えに行った。半年後必要な資金もできたのでブラジルに帰る準備をしていた。ちょうどそのころ、教会からブラジルのアマゾン川下流の地域で宣教師として働いて欲しいとの招聘を受けた。そのことでブラジルへの移動の費用が保証されたので、赴任する前に家族とともに日本の親に会いに行くことにした。父親は、私がグアテマラの山中にいたときに亡くなっていたが、母は老齢ながら健在であった。妻と三人の子供たちにとっては、初めての日本だった。年の瀬が迫っていた。

「皆さま、あけましておめでとうございます。先ほど日付変更線を通過いたしました。日本では元旦でございます。間もなく前方右手に富士山が見えてまいります」

客室乗務員のさわやかなアナウンスに、機内の窓が一斉に開けられた。朝日に輝く雲海のかなたに目を凝らしていると、真っ白な富士山の頂上が浮かび上がってきた。機内に歓声がどよめいた。そのときの感動はその後も忘れることはなかった。十三年前、横浜港から日本を出ていく独身の私を見送ってくれた富士山が、今初めて日本に来る妻と三人の子供たちと私を迎えてくれたのだ。あたかも両腕を開いて待ち続ける父親のように。

「いつかこの山に登ろう」その時私は自分に言った。

「今度友だちと富士山に登るのよ」

私の「いつか」が、小耳に挟んだこの一言によって、三十三年後に実現のきっかけを得たのだ。ちょうどそのころ、富士山の世界文化遺産の登録が発表された。テレビでは山開きの前から、連日のように関連の番組を放映していた。どの番組も混雑した登山道を見せていた。私の周りにも、高山病のために頂上を目前に下山を余儀なくされた人もいた。「もう二度と登らない」と最初の下山後に誓いながらも、四度も登山した人もいた。

私にも私なりの心配はあった。今も心筋梗塞の薬を飲んでいる身だ。医師の許可をもらったとはいえ、保証ではない。周りに迷惑はかけたくない。もちろん、二度目の発作など想像したくもない。

ブラジルにいる息子に登山のことを話した。

「パパイ（父さん）がグループで一番若いんなら心配だけど、そうじゃないらしいから心配しないよ。行っておいでよ」

スカイプの向こうで彼が言った。それもそうだ。二人で大笑いした。心配は吹き飛んだ。よい仲間とガイドと天気に恵まれ、全員支え合いながら、無事登頂。未明に八合目の山小屋を出た。上を見ると凛とした夜空に満天の星。下

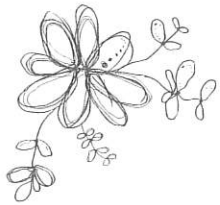
を見ると登山者のヘッドライトが移動する蛍の大群のようだ。

しかし、頂上に近づくにしたがって、空模様が急変した。頂上に立った時は激しい風に横殴りの雨で、立っているのが難しいほどであった。ほぼ目の高さで荒れ狂う黒い雲海の果ての切れ目から、鮮やかなご来光が閃く。そのたびに大きな歓声が起こる。

初めて日本を離れるとき、横浜の沖から見た富士山。それから十数年の後、家族を連れて初めて帰国した時、雲海の果てから早々と迎えてくれたのも富士山だ。

今の職場からは県境の山並みの向こうに、四季を通じて朝日夕日に映える頂上が見える。

時にひとり思う。あの日以来の奇しき山——富士と我が来しかたを。



板東洋三郎

ばんどう　ようざぶろう

1943　北海道出身
65　中央大学第二経済学部中退
67　ブラジルに単身移住
74　サンパウロのアドベンチスト大学神学部卒業
88　北米アンドリュース大学修士課程修了

この間、ブラジルで教会堂、初等学校、日本語学校、日系人子弟のための学生寮を設立

定年退職後、特養のパート職員として利用者の介助や庭園の仕事をしている

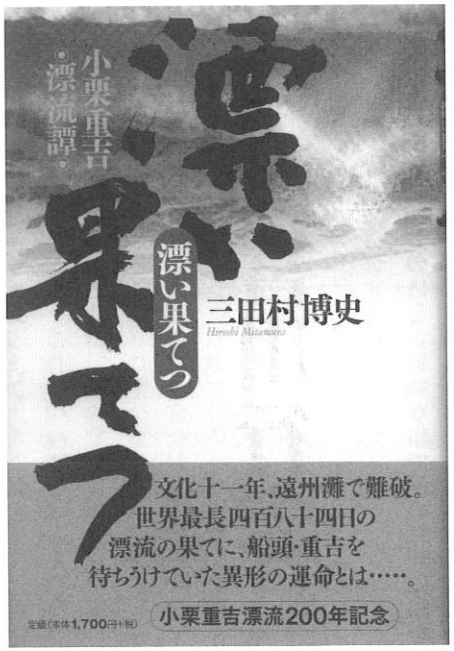
受賞の言葉

板東洋三郎

私が初めてエッセイらしきものを書いたのは、地元の大学の「エッセイの書き方」講座に参加したときでした。修了者数名で「えんぴつの会」と名付けた勉強会を立ち上げました。三年になります。月一回の例会に作品を持ち寄り合評します。今回賞をいただいた作品も皆に読んでもらいました。その時の題は不評で「この題なら、誰も読もうと思わないですね」との図星の忠告をされました。以来、原稿を幾度も読み返し、今回の題に行き着きました。公募期限の直前でした。

私の書いたものが、選者の先生方の目に触れただけでなく、賞までいただいて望外の喜びです。ありがとうございました。

富士登山中の筆者



第10回 文芸賞 エッセイ賞 優秀賞

おふくろの指文字

宮川行志

敗戦を終戦とすりかえた日の昭和二十年八月一五日から八カ月後。昭和二十一年四月十日、戦後初の衆議院議員選挙が行われた。

民主日本の再建という重大な使命をもつ選挙で、婦人にも初めて参政権が与えられた。定員総数の六倍に上る立候補者が乱立、婦人も八十人が立候補。熊本県からは五十六人が立候補した。紅一点の山下ツ子は見事当選。全国で三十九人の婦人代議士の中には松谷天光光（後年白亜の恋で園田直代議士と結婚）や、戸叶里子らがいて山下も婦人代議士の一人となった。

おふくろが、この選挙の一カ月前、三月初旬のある日、珍しく無言で納屋の影から私を手招きした。「何か用？」と言うとあわてて唇に人指し指を当てた。何か内緒ごとの気配が漂っていた。いつにない真剣な顔で私の耳許に口を寄せてささやいた。

「実は頼みがあるんだが……」と言って、言っていいのかどうか思案するように、二、三秒間黙ったあと、意を決した顔で言った。

「字を教えてくれんかいなあ。恥ずかしいことだが、長い間字を書かんので忘れちしもうた。勉強せにゃいかんとたい。ほら四月十日は投票日だろう。立候補者の名前ば間違うといかんからなぁ」と、母は小声ではにかみながらささやいた。

国民学校六年に進級直前の私に、自分の意中の立候補者の名前の字を習いたいと言うのだ。私には青天の霹靂のおふくろの頼みであった。私は訝しんだ。おふくろが字を知

らないなんてまったく気がつかなかった。

おふくろは明治二十年生まれ。尋常科四年終了で、石版がノート代わり、温石が鉛筆代わりの時代であった。農家に生まれ、幼くして父母を亡くし、年の離れた兄に育てられた。兄は働き盛りで亡くなり、以後、兄嫁の片腕として家を支えてきた。働き者の嫁として、地主の息子の父と結婚した。

父は農業を嫌い、役場勤めをしていた。そんな父と一緒になったおふくろは父に悩まされた。父の選挙道楽に危機を感じた祖父は父を禁治産者にし、廃嫡した。父は競走馬飼育や製材業を起こして失敗し、残ったわずかの農地をおふくろ一人で耕し、おふくろの才覚で魚貝の採集とその商いで、一家九人の生活が支えられていた。子供八人のうち一人を死なせた。

子供の教育には熱心で七人全てに貧しい田舎から中等教育を受けさせた。父は事業の失敗で酒びたりの日々を過ごしていた。そんななか四十五歳で出産した私を特に可愛がっていた。「この子は末っ子だから親と別れるのが早いからなぁ……」と言って寸暇を惜しんで育んでくれた。農作業の段取り、農具の使い方、牛馬の使い方、漁具の扱い方、天気の見方等、大人顔負けの生活力をおふくろは折りにふれ仕込んでくれた。

おふくろの手の五本の指は、大きく節くれだち皮膚はごつごつ荒く、節の皺は深く、それぞれの指が力強く物を掴む力は壮年の男の手を凌ぐ力感があった。掌の皺は生命線が真横に端から端まで走っていた。そんなおふくろの掌を使って、選挙の投票日前の十日間、毎日、納屋の筵の上で母子は指文字を書くことにした。

「片仮名、平仮名、それとも漢字にすると」

「やっぱり漢字より、平仮名のほうがやさしか。女子だから平仮名が似合うよ」

おふくろは、女子だから平仮名が似合うと言う。それは自分も、自分の投票しようとする立候補者も女性だからという二つの意味があったのである。選挙道楽の父は自分の支持者に投票するよう頼んでいた。おふくろの結婚以来、初めての夫への反抗である。

まず私の学習帳面に筆で大きく書いた。

「やました　つね」（山下ツ子）を「や・ま・し・た・つ・ね」と、一音一音小声で言って懸命に練習した。秘密の特訓の甲斐あって、おふくろは一日目に完全に憶えてしまった。私の掌を、ささくれだった掌でしっかり握り、鉛筆を舐める仕草をして、太い人差指に唾をつけて一字一字をていねいに書いてゆく。おふくろの唾がなまあたたかく、掌についてゆく。一字書くごとに、私の掌を目の前まで奉げ、肯く。私の眼をのぞきこみ、これでいいかというように瞬きをして微笑む。私もそれに応えて大きく瞬きをして微笑

み返す。

十日間の母子の指文字の稽古は、誰に知られることもなくあっという間に終わった。指文字の稽古は二人の生涯の最大の秘密であり、楽しみでもあった。

投票日の朝、父はいつにないやさしい声で自分の支持する立候補者の名前を言って「頼む」と言った。おふくろは、「生まれて初めての選挙だから、わたしの好きなようにさせてください。お父さんの候補者は私が入れなくとも当選しますよ」と言って「わたしもこの選挙では勉強しましたよ」と続けた。父は、「そうか」と言って黙ってしまった。この日を境にして、夫婦の力関係が変わっていった。

おふくろは投票に出かける前に、家族がいないことを確かめて私に手招きをした。最後の指文字の稽古を私の掌でゆっくりなぞって、例の瞬きをし、微笑んで出かけた。

おふくろの意中の人は全国の三十九人の婦人代議士の一人として活躍する場を得た。

おおげさで面映ゆいが、民主日本の再建という重大な選挙を親子で指文字を通じて体験したのである。成人後の選挙の投票のたびに、おふくろの節くれだった掌を思い出し、なまあたたかい唾のくすぐったいような感触が掌によみがえってくる。

選挙の投票日は、懐かしくもうら悲しい想いが交錯する日でもある。

受賞の言葉　宮川行志

文藝思潮エッセイ賞の存在を知ったのは、第10回銀華文学賞当選作を書かれた波佐間義之さんから送られてきた文芸思潮を通じてであります。文学賞は無理でもエッセー賞なら老体でも書けるのではないかという気がしたからであります。八十歳に手が届こうとする今、思いがけなく受賞の知らせを受け、嬉しさがこみあげてきました。次の目標、「小説を書く」という意欲が強く湧いてきました。選考委員の皆様に心から御礼を申し上げます。ありがとうございました。

宮川行志

みやがわ　こうし

1935　熊本県生まれ
67　熊本大学教育学部卒業と同時に教員となる
38年間勤務定年退職
退職後趣味の野菜作りの傍ら、教育評論雑　誌の編集に携わる
97　「詩と眞實」同人加入
2004　「九州文学」同人加入
06　県民文芸賞　小説二席受賞
06　詩と眞實賞　小説受賞
07　九州文学賞　小説受賞

第10回 文芸思潮 エッセイ賞 優秀賞

足跡

家森澄子

ある日の夕方帰宅すると、庭に降り敷く雪に足跡があった。

飛び石の上を渡って歩くには、歩幅が足りないのか、小さな長靴の跡は、飛び石の横に左右のバランスよくわき目も振らず、真っ直ぐ並んでいた。

妹、和子の足跡であることが、すぐにわかった。この吹雪の中を、小さな体を丸めて歩く妹の姿を想像しながら足跡を追ってみた。足跡は、郵便受けまで続いていて、よく見ると、こんもりと盛り上がった飛び石に躓(つまず)いたのか、長く伸びた足跡が一カ所あった。転んで怪我などしていなければいいがと、急に不安の思いが胸で渦を巻く。

郵便受けの中を見ると、梅の花を模(かたど)ったカステラが一つ、何枚ものちり紙に包んで入れてあった。

私が、六年生のとき、悲しい別れが二度もあった。母との死別、妹との別れである。

昭和二十五年母が倒れて入院して三ヶ月目の夜半、親戚の叔母が激しく雨戸を叩き、私たちに知らせに来てくれた。

「お母さんの容体が悪いの、すぐに病院へ行こう」

言いながら、寝ている和子を背負い、病院へ向かう叔母の後を追った。

和子は眠そうな眼を擦りながらも、「おかあちゃん」と、嬉しそうな声を出している。無理もない。母が入院以来毎日母を恋しがり、寝言を言っては飛び起きたりしていた。妹は、母のところへ連れて行ってもらえることを喜んでいる。こんな妹の声を聞くと、自分の悲しさだけでなく、妹への不憫さも加わって熱い涙が頬をつたう。この涙さえも無情な二月の寒風が冷たく凍らせた。

病院についたときには、母はすでに黄泉の客となっていた。そんな母を眠っていると思ったのか、妹は叔母に抱かれた体をねじるようにして、母の頬を触り、

「おかあちゃん、おかあちゃん」と呼んでいた。このようすを見て自分の悲しさよりも、妹への愛おしさに息の詰ま

る思いであった。

母はそのとき三十六歳、父はすでに戦死していなく、十七歳の姉を頭に、私と、九歳の弟、五歳の妹が残された。

不憫に思った親戚の、父のいとこに当たる人が、

「妹を養女として育てたい」と、言ってくれた。

しかし、私たち姉弟には決して嬉しいことではなかった。

母を亡くし、そのうえ、妹と別れることは、身を裂かれる思いであったが、祖父が、

「みんなのために、一番いいことだから言ってくれているんだよ。同じ町内だし、家の本家だから、いつでも和子には会える」

祖父に諭されると、幼い私たちは何も言えなかった。

数日して親戚の叔母さんが妹を迎えに来た。妹は親戚の家に行かないとは言わなかったが、親戚にお世話になる訳は、なぜなのかわからず、

「お姉ちゃんも、お兄ちゃんも一緒に行こうよ」

と、叫んだ。でも、一緒に来てくれない姉兄への腹いせを、ゴム草履を履いた足に込め、地団駄を踏みながら、叔母さんに手を引かれ足跡を残して家族と別れた。

妹は、五人姉妹のいる親戚の家へ六番目のこどもとして加えてもらったのである。

妹の養父母はもとより、年の離れた義姉さんたちも妹を、寂しがらせないように気を遣ってくれた。義姉さんに手を引かれて、どこへでも連れて行ってもらって、可愛がられている妹を見ると、

「これでよかったんだ」

と、思う裏側で、どこか手の届かない所へ妹を私の体から吸い取られていくようで、複雑なおもいであった。

学校帰りに、部活のない日は遠回りして妹の家の前を通る。夕方早い時間だと、外で遊んでいることがある。私は友達と遊んでいる妹の後ろ姿をちらっと見ると、なぜか安心できた。

ところが、妹の方が先に私に気づいて、走り寄ってくることがある。

「お姉ちゃん」

と、言ってひざまずいている私の両手をしっかりと握りしめ、そして確かめるように妹は、

「誰もおうちにいないから、おやつを手紙入れに置いて帰るの、みんなで食べている?」

如何にも気にかけているように、私を見上げて聞く。

「ありがとう、食べてるわ。でも、持ってこなくてもいいから、和ちゃんが食べたら」

諭すように、妹の顔を見ると、妹が心配そうに覗き込んで私の顔をじっと見て、

「お姉ちゃんやお兄ちゃんには、お父さんやお母さんがいないもん」

幼い妹の気遣いに、返すことばさえなく、

「もう、遅くなるからおうちへ帰りなさい」

こう私が言うと、妹は小さな唇を巻き込み、口は固く閉じて、差し込むのを必死で耐えて、こくんと、頷いて手を振りながら帰っていった。

妹を送って、堪えに堪えていたものが堰を切って頬をつたった。

家でも姉弟三人で妹、和子の話が出なかった日は一日もなく、郵便受けに入っていたものを見ては、食べることより、妹の幼心がいじらしくて、涙することが多かった。

年月は悲しいことも少しずつ忘れさせてくれ、妹も高校を卒業して就職し、姉も私も嫁いで家を出た。

妹の縁談も決まり、小雪がちらつく節分の日に、花嫁姿の妹は養父母に付き添われて両親の仏壇に挨拶に来た。

弟はこの日、妹、和子に、

「和子、郵便受けにいろんな差し入れを置いてくれてありがとう。今日は郵便受けから兄ちゃんの気持ちばかりの餞を持って行ってくれ」

弟のことばにみんな笑いながら涙をふいた。

庭にいつの間にか積もった薄雪の上に、幸せに向かって歩く、妹の足跡が残っていた。

受賞の言葉

家森澄子

この度、受賞のお知らせを頂き、驚きと嬉しさでいっぱいでございます。特に今回の作品には、私がこれまで生きてきた人生の中で、最も忘れられない、姉妹愛を書かせていただきました。

書くことは、人との出会い、楽しみ、苦しみ、遠い日の思い出、日常の諸々の雑感を文字に託すことでもあります。それによって自分を見つめ直すことができたように思います。

また、書くことにより「人生を二度生きる」と言われていますが、歳を重ねる度に、このことばの意味を感得する気分に浸ることが多くなりました。

十八年書いてまいりましたが、今回の栄えある受賞を励みに益々、アンテナを張り巡らし、心のレンズを磨き、自分にしか書けないことを書いていきたいと思います。

家森澄子

やもり　すみこ

1938　岡山県倉敷市生まれ
70　倉敷市役所入所
85　近畿大学短期大学部商経学科卒業
2001　倉敷市役所定年退職
05　倉敷市民文学賞随筆の部大賞受賞
12　ふくい風花随筆文学賞優秀賞受賞
同人誌「随筆春秋」会員

ハナの墓

近藤幹夫

私が小学校へ入る頃、父は農耕馬相手の蹄鉄の仕事をしていた。

私の家は、次男に生まれた祖父が生家からわずかの田と家、屋敷を貰って分家したが、祖父はよく町へ出稼ぎに出ていた。父も祖父の後を追うように、学校を卒業するとすぐ町の織物工場へ勤めた。ところが当時景気は悪く、どうにか父は職に就いたものの、いつまで経っても日雇い勤務である。日雇いは正社員に比べ、賃金を含め待遇に格段の差があり、父が正社員になれる見込みは当分ない。日頃から祖父は、年頃になった息子の将来を考え、何とかしなければと思っていたようだ。

そんな時に祖父は、たまたま家に来た東京の遠戚の人から馬の蹄鉄を教えてくれる学校のあることを聞いた。当時の農業は、馬がなくてはできない。父はすでに二十代の後半になっていたが、祖父の話を聞いてすぐ東京へ行くことを決めた。

東京で父は、二年間その遠戚の人の家から学校に通い、技術を習得した。学費は、祖父が出稼ぎの日数を増やして都合し、父が戻ると家の後ろに馬一頭を入れて仕事ができるほどの小屋を立てて用意していた。

幸い、田舎で蹄鉄の仕事をしている人は少なく、父はすぐ商売ができた。その頃に父と母は結婚したが、父はもう三十を過ぎていた。

結婚式が済むとすぐ、母も父の仕事を手伝ったが、父より五歳年下の母は、女学校を終えてから家事手伝いだけをやっていたので、慣れない仕事にさぞ面食らったことだろう。母の仕事は、大きなスコップで炉の中へコークスを絶え間なく放り込む。時には大きなハンマーを扱うという、普通、男のする仕事である。いつも母の首には薄汚れた手拭いが掛かっていたが、私には母が黙ってスコップを動かしている記憶だけが残っている。

父は炉の中の真っ赤になった鉄棒を取り出すと、すぐ金槌（かなづち）で馬の足の大きさに合わせて平たくしながら曲げていく。

仕事は、雪が消える頃から田起こしが始まるまでと、農繁期が終わって秋の刈り取りが始まるまでが特に忙しかった。その時には、近在の村からもたくさんの馬がやってきて、小さな小屋の前にはいつも三、四頭の馬が順番待ちをしていた。

父の額には、商売を始めて間もないころ、ちょっと気を抜いた父の手から離れた馬の後足に蹴られた傷痕が死ぬまで残っていた。

父には特に思い入れの深い馬がいた。名前をハナといって、大きな体とは逆にとても優しい目をした馬だった。いつも、七十過ぎの三作さんというこれまた大柄で純朴なお爺さんに連れられてやって来た。小屋に入る時、大概の馬は駄々を捏（こ）ねるがハナは三作さんが手で合図すると、自分から入る。その都度、父は微笑みながら手をハナの首元に添えて、「さあ、ハナ。始めるぞ」と一声掛ける。

ハナはわかっていて、父が俯くとすぐ進んで足をあげる。素早く父は、ハナの足を股の間に挟んで寸法を測っていた。

蹄鉄は大きくても小さくてもいけない。大き過ぎると、田の中に入った馬の足が楽に抜けず、小さいと足そのものを傷つけてしまう。けっこう細かい仕事なのだ。馬は何度も寸法を測り直していると、だんだん苛立ってくる。父は大方一、二度の手直しで装着していた。

ところが父が四十を過ぎた頃、祖父や父の願いを嘲笑うかのように農業の近代化が進み、急速に機械化が進んでいった。父が商売をやり出してわずか十年しか経っていない。

そんなある日、農協から農機具の展示会の案内があった。今回は今までと違い画期的な機械が実演されるという、大々的な宣伝が村の隅々にまで行き渡っていた。

父もその日、朝早くから会場へ向かった。目玉の商品は耕運機と名付けられている。雛段の上には華々しく五、六台が飾られ、別の一台は会場前の田んぼの中で、若い職員の手によっていとも簡単に操られている。畔の上に一列に並んだ人々は固唾をのんで見ていたが、父はどんな思いでこの光景を見ていたのだろうか。

思えばこの日を境に、悲壮な顔をして帰って来た父の予感通りに、小屋にやってくる馬の数が急激に減っていった。

またたく間に、ハナを含めて十頭ほどの馬しか来なくなってしまった。これでは父も生計が成り立たず、午前中は働きに出たが勤め先が小規模な工場だったので、仕事の都合で帰りが午後にずれ込むこともしばしばである。こんな時に来た馬主はすぐ出直してくるが、ハナだけは、いつ

までも煙草をふかして待っている三作さんの横で大人しく下を向いたまま瞬きもしないで立っていた。

時代が足早に、容赦なく父を踏み潰していった。それから、一、二年の間に、とうとう来るのはハナだけになってしまった。父はもう毎日朝から晩まで工場へ働きに行き、ハナの蹄鉄作業は日曜日にしていた。

二、三年が過ぎて雪が消え、そろそろ農作業の準備にかかる時期に、父は勤めの帰り道、村の中で三作さんとバッタリ出会った。そこで、この冬にハナが病気で死んだと知らされた。肩を落としボソボソと喋る三作さんの顔は、無二の親友を亡くしたかのようにいつもの覇気がなく、急に老けたように見えたという。

この話を聞いて、父にはハナが自分はもう必要ないと勝手に思い込んで逝ったように思えてならなかった。

夕食の時、ポツンと家族に告げた後の父の頬に涙があった。

次の日曜日、父は一人で朝から小屋の前に手作りのハナの墓を作った。小さな石を敷き詰めた真ん中に路傍の白い大きな石を立てたあと、父はキッパリ一言、

「ハナの墓や」

と言って、口を締めた。

父が亡くなって十年過ぎたがその墓は、今でもくすんだ色をして、あの時のハナのようにやや俯き加減のまま立っている。

近藤幹夫

こんどう　みきお
1947　福井県生まれ
立命館大学経営学部卒業
自営業
第4回ノースアジア大学文学賞奨励賞受賞
第5回ノースアジア大学文学賞奨励賞受賞
第17回ふくい風花随筆文学賞優秀賞受賞

受賞の言葉　近藤幹夫

このたびはたいへん高い評価をいただきまして、まことにありがとうございました。書き始めて以来「文芸思潮」エッセイ賞の入賞は、とてつもなく大きな夢でした。

日頃、過疎化が急速に進む小さな町で必死に悪あがきをしながら題材を求め続けている毎日です。

今回は、六十七歳になってようやく十年前に亡くなった父を忍ぶ気持ちが強く湧いてきて、一つのエッセイにしました。これからも、片田舎にある身近な題材に目を向けながら、できるだけ丁寧に書いていこうと思います。

賞をいただけたことは大きな励みとなりました。

第10回 文芸思潮 エッセイ賞 優秀賞

アオサギのいる風景

井上幸子

アオサギは川や湖、海など、水辺ならよく見ることができる大形の鷺（さぎ）だ。背や翼は青灰色で、頸も脚も長くスマートな体形を、中には鶴と見紛う人もあるようだ。岸辺に佇みじっと獲物を待つその姿は景色に溶け込んで見えるときもある。だが鳥にあまり関心のない人はいること自体気づかないかもしれない。

なかなか美しい鳥なのだが、バードウォッチャーの間ではそれほど人気がない。大方のバードウォッチャーは、もっと珍しい鳥や可愛らしい鳥に惹かれるのだ。眼にとめても、たいていの人は「なーんだ、アオサギかぁ」と思ってしまう。私もそんなものだった、あの場所で出会うまでは。

夫が私にまた新しい任地を告げた。広島だった。嫌だなと内心思った。怖いのだ、原爆ドームを見たくないのだ。幼い日、親に連れられて映画を見に行った。『原爆の子』という映画だった。新藤兼人監督の反核映画で国際的な賞を幾つも受賞した作品だったが、小さな子供にはただただ怖いだけの映画だった。

向日葵（ひまわり）の咲く朝に突然の閃光を浴び、人々は無残な姿になった。赤ん坊が、母親が、生徒が、先生が、その瞬間まで普通に暮らしていた人々が、血にまみれて、焼け爛れて……。

逃れることのできない刹那に人間というものがあんな姿になってしまうのか？　小学一年の私は、その絵をとても受けとめることはできなかった。

そして、一瞬にして瓦礫の原となった街に、鉄骨のむき出しになったドームが、亡霊のように立っていた。

アオサギのいる風景

その映像が脳裏に刻まれ、幾日も眠れなかった。大人になってもいつまでも悩まされた。印刷物にドームが載っていると、胸苦しくなり、全身の血液が凍るような感じになる。その都度急いでページをめくっていた。このことは誰にも話せず、ずっと心に秘めていた。子供のときに受けたトラウマが、五十年近くも続くなんて我ながら呆れるばかりである。

転居した家は爆心地から少し離れていた。日常的にはドームを眼にしないで暮らせる。

この街に住み、数か月経つとあることに気付いた。テレビ、ラジオなどから毎日必ず「原爆」という文言が流れるのだ。昔から広島に暮らしている人には気にならないことかもしれないが、とりわけその言葉に敏感になっている私は心の隅でいちいち反応していた。

家は幹線道路から坂を上がったところにあった。背後は標高二百六十一メートルの山。低山だが見晴らしはよく、瀬戸内海まで見えた。四方に長々と尾根を張り出し、どこも麓まで宅地が迫り、登山道も数本あって市民の手ごろなハイキングコースになっていた。登山が趣味の私には日頃のトレーニングに恰好であった。

いつも我が家のある西の方から登って頂上を往復していたが、そのうち同じコースに飽きてきた。他のコースにも脚を伸ばしたくなった。頂上から東の方へ延びる尾根筋の端まで行ったときは、向かいの小山に立派な仏舎利塔が見えた。これは中心街からもよく見えるものだ。銀色にまばゆく輝く塔は原爆犠牲者の冥福を祈り、世界平和を祈念して建立されたときく。

まだ行ってなかった南の方の尾根に、今日は向かうことにした。尾根は緩く下って、やがて疎林になり片側が開けてきた。街と空が見える。気がつくと、足元はコンクリートの崖だった。直ぐ下に病院のような建物があった。大きな窓から中の様子が見える。

あっ、と思った。不意に後ろから押された気がした。そうかこれは、原爆養護ホーム。地理的にこの辺りにそういう施設があることはなんとなく知っていた。寝間着姿の老いた女性たちがゆっくりと動いている。並んだベッドが見える。

一瞬混濁した。あの人たちの生きてきた時間。私の生きてきた時間。その差違が私の胸を締めつけた。苦しみのコアをあの人たちは生きてきた。その同心円の外側のもっとはるか外側を私は生きてきたのだ。

大幹線道路の上を新交通システムは快適に走っている。この電車は中心街に入ると地下に潜るがそれまでは高架を行く。車窓からパノラマのように街が見下ろせる。広島は緑と水の街だ。新緑の並木、陽光に映えるビルやマンション、水量豊かに流れる川。川の中州の林には鷺たちがコロニーをつくっている。とても半世紀前、一瞬にして十数万の無辜（むこ）の人々が犠牲になり、焦土と化した街とは想えない。

平和公園に着いた。私はドームを目指していた。見ないですむものを。私の中の何かが許さなかった。直視せよと言っていた。

熱に浮かされ浮遊するような足取りになっていた。心臓が高鳴ってきた。色とりどりの服装の観光客が歩いている。外国人も多い。

ドームの前に来た。私は対峙した。

あの、亡霊のような恐ろしいものはなかった。原爆ドームはユネスコ世界遺産だ。長い年月に錆びて朽ちて崩れてしまうからと、鉄骨は塗装したものに付け替えられ、ひび割れたコンクリート壁も補修されていた。崩れたコンクリート片の瓦礫は一面にあるが、なんだか舞台装置を見ているようだ。

私は周りに廻らされた柵をひと回りした。そしてドームを見上げた。青空に幾本もの鉄骨がアーチを描いていた。鉄骨の間に一羽のアオサギがとまっていた。

あの鉄骨の上空であれは炸裂したのだ。長い長い時間が過ぎ、今は鷺の止まり木になっている。そんな歴史を鷺は知ろうはずもない。あそこは四方を見渡せる安穏な場所なのだ。アオサギは青灰色の翼を少し開いて、嘴（くちばし）で梳（す）くようにのんびりと羽繕いしている。

長い間悩まされたトラウマがほぐれていった。緑滴る公園の河畔で青い眼をした若い旅行者たちが語らっていた。

井上幸子

いのうえ　さちこ
東京都出身
夫の転勤で各地を転居
定年後、Ｉターンで田舎暮らし
第６回「文芸思潮」エッセイ賞奨励賞

受賞の言葉　井上幸子

映画の力ってすごいです。幼少期に観た一本の映画がかくも長く私の心に残り「戦争は絶対いやだ！」という強い思いを植え付けたのですから。終戦の翌年に生まれた私は戦争の実体験はありません。しかし戦争の惨たらしさが解ったのです。感受性の強い時期にこうした作品に触れると理屈ぬきに戦争はしてはいけないものだと理解してしまうようです。

この度は、思いもよらぬ立派な賞を頂き本当にありがとうございました。

ランドセル

西本美彦

昭和二十二年の春、私の小学校入学が近づいていた。戦後のことでもあり、準備らしいこともなかった。まともな服もなければ、帽子もない、靴も靴下もない。家が貧しいことはよくわかっていたので、あれが欲しい、これが欲しいと言うこともなかった

元手のない者は漁業で喰っていくしかなかった。父もシラス漁の雇われ漁師であった。シラスなら、年中漁ができるのだ。二艘の網船にそれぞれ数人の漕ぎ手が乗り込み、仕掛けた網をたぐり寄せてシラスを獲る。船にはエンジンもモーターも付いていない。作業はすべて漁師の腕力まかせである。シラスが獲れると、大人二人でやっと運べるほどの大きな竹かごに入れる。竹かご一杯分ほど獲れると漁師たちの顔はほころぶ。その日の口銭は保証されるからだ。竹かごに三、四杯も獲れれば大漁である。若くて元気の良い漁師が獲れたばかりのシラスを小舟で魚市場に運ぶ。シラスは足が速い。舟の櫓杭がギーギーきしむ音も激しさを増す。

芋飯と味噌だけの昼飯を済ますと、親戚の子供たち四、五人と連れだって、堤防沿いに魚市場へと歩いて行く。どの子も竹編みの小さいざるを帽子代わりにかぶっている。このざるこそが子供たちの大事な商売道具である。

シラスを積んだ舟が船着き場に近づくと、子供たちは足早に舟に群がる。まず、水揚げされた竹かごのなかをちらっと覗く。お裾分けしてもらえるだけの漁であるかを見定めるのだ。漁が少ない時は、子供たちもわきまえていて、ねだることはしない。

勝負は、船着き場から魚市場までのわずか三十メートルの間である。大漁の時は漁師も気前がよい。子供たちはどこの網元の舟であってもまるで気にしない。合間を見計らって、「おんちゃん、ちっと分けてや」と言って漁師の手前にひょいとざるを差し出す。漁師は反射的にシラスをざるに掬う。どこの家の子であるか、確かめもしない。どこかの親戚の子であろうと勝手に思っている。子供と漁師の一瞬の駆け引きである。このこつを身につけているのは漁師の子供だけである。とくに自分の父がシラスを運んできた時は、漁が少なくても、ざる一杯盛ってくれる。

集まってくるのは子供たちだけではない。シラスを茹でる釜小屋の周りを一日中うろついている野良猫たちも心得ている。魚市場の気配を読み取り、当たり前のような顔をしてぞろぞろと這い出してくる。猫たちは、竹かごの編み目からこぼれ落ちた生のシラスにあずかる　泥棒をしているわけではないから、だれも追い散らしたりはしない。

シラスをもらうと、子供たちはあっという間に町のなかに散っていく。門構えの立派な家を二、三軒も回れば新鮮なシラスはすぐ売れる。ざるに半分もあれば二、三十円、ざるに一杯もあれば五十円にはなる。稼いだ金は家に帰って母に渡す。母はその金をいつもの引き出しにしまう。

三月が終わりに近づき、桜がぽつぽつと咲き始めた。まわりの親戚も「気持ちばかり」と言いながら入学祝いを持ってきてくれた。縫い物上手のユキおばさんは、タンスにしまっていた父の軍服を裁断し、子供用の半ズボンを縫ってくれた。一番年上のヨシおばさんはわら半紙の帳面を二冊、父と同じ船に乗っているトシおじさんはアルミ製の筆箱とHBの三菱鉛筆を三本買ってくれた。母は古いセーターをほどいて、数日かけて白と青の縞模様のセーターを編んでくれた。私はそれだけでもわくわくするほど嬉しかった。

四月に入り気温が上がると、小学校につづく堀川沿いの桜並木はすぐにも満開になろうとしていた。遊びから帰ると、父が「ちょっと、来い」と言って、私を仏壇のある部屋に呼び入れた。古新聞で何重にもくるんだ包みを渡された。一枚一枚めくっていくと、最後に長方形の大きな紙の箱が出てきた。「開けてもええ?」と言い終わらないうちに私の手はふたを取っていた。

『ランドセル』だ。私の入学を祝う豪華なランドセルであった。贅沢にも黒光りしていて、背負ってみると接着剤の臭いがプーンと鼻を突いた。私がシラスで稼いだ金を母が使わずに貯めておいてくれた。それに父が金を足して、闇市で手に入れたという。私の喜びぶりを見て、誇らしげに笑っていた。

ランドセルのなかには二冊の帳面もアルミの筆箱も鉛筆も入れてあった。消しゴム代わりにする黒いタイヤの四角

い切れ端までちゃんと揃えてあった。ランドセルを背負って歩くと、筆箱のなかの鉛筆がカタカタと小気味よいリズムで鳴った。

母は「ちゃんと、お礼をせんといかんぜよ」と言って、仏壇を指さした。仏壇に手を合わせて、「おおきに、おおきに。ナンマイダ、ナンマイダ」と言う声は嬉しさのあまりうわずっていた。

長男の入学式ということで、母は嫁入りの時に持ってきたという一番上等の着物を着ていた。私は朝早くから自慢のランドセルを背負って、家中を走り回っていた。

小学校は小高い城山のふもとにある。校門をくぐると、真正面に古びた講堂が建っている。その前の築山には二宮尊徳の小さい銅像が遠慮気味にポツンと立っている。隣には、まだ幹周りの細い桜の木が一本だけ植わっていて、ありったけの花を咲かせて二宮尊徳の銅像を惜しげもなく飾っていた。

講堂は古くて危険だということで、入学式は行われなかった。生徒たちは直接自分の教室に入り、担当の先生の話を聴くことになった。はしゃぐ子も、暴れる子もいなかった。みんな不安げな顔をして、下を向いて黙って座っていた。見回すとランドセルを持っている子はほとんどいなかった。軍隊下がりの堅い革カバンを提げている子もいた。風呂敷一枚しか持って来てない子も多くいた。買ってもらえた教科書は国語と算数だけである。教科書二冊と帳面二冊、それに筆箱だけを入れるには、私のランドセルはあまりにも立派すぎた。

梅雨も終りに近づいたある日のことである。校門を出た時から雨足が強くなり、叩きつけるように降り始めた。ものの十分も走れば家に帰れる。私は迷わず、わら草履を脇に挟んで、ずぶぬれになりながら全速力で家に向かった。自分の家にあと数歩で飛び込もうとした、ちょうどその時であった。

背中が突然スーッと軽くなった。同時にランドセルの肩掛けがするりと抜け落ちた。一体なにが起こったか分からなかった。そっと自分の後ろを振り返ってみた。地面の泥にまみれてランドセルが無残な姿で崩れ落ちていた。たっぷり吸い込んだ雨水でふやけて、ぐしゃぐしゃに歪み、布地が剥がれてまとわりついていた。

まるで可愛い仔犬でも抱き上げるように、ランドセルを両手で優しく拾い上げようとした。すると底がバサッと抜けて、教科書と帳面と筆箱だけが地面に滑り落ちた。驚いて手を離すと、自慢のランドセルは茶色の厚紙と布の醜い塊となって地面に転がっていた。一瞬のうちに無残に変形したランドセルの亡骸（なきがら）を呆然と見つめるだけであった。

ちょうどその時父の声がした。「やっぱり、いかんかったか」戸口に突っ立ったまま、父は目をそらし、ぼそっとつぶやいた。「厚紙に布を張ってあるだけじゃき」うしろで母が震えていた。

紙粘土のようになった塊は雨に叩かれて少しずつ溶けて流れて、今にも消えていきそうであった。降りしきる雨を恨みながら、両手でそっと掬い上げると、厚紙の塊に絡まりついた黒い布地がまるで死者の頭髪のように指の間からするりと垂れ落ちた。あたりの雨を蹴散らすかのように私は、「ウオーオ」という無念の叫び声を放った。すると堰を切ったように大粒の涙がぽろぽろと溢れだした。

西本美彦

にしもと　よしひこ

1941　高知県生まれ

61 － 71 ベルリン・フンボルト大学文学部言語学科　専攻：インド・ヨーロッパ語比較言語学、フィン・ウゴール語比較言語学

同大学　博士コース　(Dr. phil)

71 － 78　立命館大学

78 － 2004　京都大学

04 － 11　関西外国語大学

受賞の言葉

西本美彦

昨年の三月に「言語学」の概論書を書き終わったとき、言語の大海原を泳ぎ切る力は自分にはないと初めて思いました。欧米の研究者のレベルにはほど遠いことを悟るのに四十年も費やしたことになります。古代ギリシャの詩人アリストパネスの言葉に「アテネにフクロウを運ぶ」というのがあります。知恵の女神アテネのもとに知恵の鳥フクロウを持っていく、つまり無駄なこと、無意味なことをすること意味しています。私のフクロウも思えばいい加減なものでした。「好きなところへ飛んでいけ」とばかりに野に放ってやると、不思議なほど気が楽になりました。これからは自由にものを書いてみようという気になりました。

昨年四月に初めて応募したエッセイ『スズメたちは西へ飛んでいった』で「社会批評奨励賞」をいただきました。

人は歳をとると、昔の嫌な思い出ばかりが走馬燈のように脳裏をめぐります。今回の『ランドセル』の話は六十数年も昔のことであるのに、今でも繰り返し思い出してしまいます。まさか優秀賞に選ばれるとは思いませんでした。この受賞を励みにして、新しい分野でもう一度自分を試して見たいと思います。五十嵐先生をはじめ、選考委員会の先生方には心から感謝いたします。

第9回 文芸思潮 エッセイ賞 優秀賞

子牛の涙

八束一臣

1

私の子供の頃といえば、昭和三〇年代の頃である。山陰地方、弓ヶ浜半島の農村では、牛を飼っていた。

屋敷の中に大きな牛小屋があって、薄暗い小屋の中を目をこらして見ていると、大きな牛が横になっている。黒い牛なので、薄暗さの中では見にくかった。ともかく牛小屋は、昼間でも薄暗かった。牛小屋の入り口には、馬草桶と石制の水飲みがあった。

牛の世話は祖父の仕事であった。元線路工であった祖父は、年老いていて、牛の世話がちょうどよかった。私は、学校から帰ると、祖父を手伝って牛の世話をすることがあった。

世話といっても、飼葉を切る大型の押し切りに、稲藁の束を突き入れ、両手で力いっぱい打ち下ろして切る。力を抜くと稲藁は最後まできれない。子供の力ではなかなか難しい仕事だったが、少しずつ慣れていった。

切り分けた稲藁に糠をまぜて、飼葉桶に撒いた。糠の匂いに誘われて、大きな牛はのっそりと起き出してきて、稲藁をゆっくりと食べ始める。時折、食べるのをやめて水を飲む。長い時間かけた牛の食事を見ているのが、私は好きだった。

牛の大きな目は澄んでいて、美しかった。あんなに大きな図体をしているのに、怖さを感じたことはなかった。あの澄んだ目を見慣れていたからだと思う。

2

母牛は大きなお腹をしていた。子牛が生まれたのは朝方だった。大人たちは夜通し交代で牛小屋に張り付いて、子牛の生まれるのを待った。

「生まえたよ」と、姉が呼びに来て、かけつけて見ると、疲れ切った母牛の横で、子牛は立ち上がろうと踏ん張っていた。歩こうとすると、ふっとよろけた。足腰がまだ十分でなかった。朝の光が牛小屋の板壁を通してかすかにさし込んでいた。

立ち上がって、ふんばって、足に力を入れている子牛をみると、生命の力を目の当たりにしたようで、どこか神々しかった。

子牛がお乳を飲んでいる間は、母牛と一緒に過ごしていた。少し成長して乳離れの時期になると、隣の子牛の部屋に移された。牛小屋には、親牛の隣に、子牛用の小さな部屋が作られていた。その部屋は西に向かって木の窓が開けられていたので、明るかった。

学校から帰ると、まっさきに子牛を見にいった。子牛は好奇心が強くて、必ず寄ってきては、木枠の隙間から鼻を出してくる。私が手を伸ばすと、舌を出してなめた。子牛の舌は生暖かかった。唾液でぬれていて、子牛の生命を実感できた。

親牛は十日に一回くらい、庭に引き出された。体を専用のブラシで梳かして、きれいにするためである。庭には牛をつなぐ大きな杭が打ち込んであった。

父はブラシで牛の体を強く梳いていく。牛の毛がたまってくると、すかさず左手の金属製のブラシでこすった。すばやい動作だった。私も小さなブラシを作ってもらって、父の仕事を手伝った。父は本当はわずらわしく、邪魔だったと思うが、よたよたした私の手伝いを楽しんで見ているようなところがあった。

親牛がブラシを掛けられている間、子牛は庭を跳ね回って遊んだ。私は手伝いにあきると、よく子牛を追っかけた。子牛の足は速く、とても追いつけなかった。

よく見ていると、子牛は庭をはねまわりながら、いつも母牛の方を見ていた。母牛も子牛から目を離さなかった。親子の牛は目と目で心を通わせていたようだった。

親牛の毛梳きの時間は、子牛にとって、小さな小屋を出て、庭を駆け巡る自由な時間だった。子牛は跳ねながら、自分の能力を試しているようだった。私が追っていくと、さらりとかわすのが、しだいにうまくなっていった。外に駆けだしていって、かけっこしたら、とてもかなわないと思った。子牛の成長は早く、私を次第に追い抜いていくので、子供心にちょっぴり悲しかった。

3

子牛は柔らかい草を好んだ。草刈りは姉と私の役目だった。週に二日くらいだったが、子牛の餌の草刈りに出かけた。学校から帰ると、姉と二人、姉が背負子をせおい、たんぼ道に出て、草刈り鎌で草を刈った。草刈り鎌は大人用しかなくて、子供の手では扱いが難しかった。一振りで草をなぎ倒すので、刃は鋭かった。扱いになれている姉の手

元を見て、見よう見まねで扱いに慣れていった。

草を刈っていると、辺りは草の匂いに包まれた。刈り取ったばかりの草を鼻に近づけると、清々しい草の匂いがして快かった。

刈り取った草で一杯になると、姉は重くなった背負子を、「よっこらしょ」といって、両肩にかついだ。「よっこらしょ」は大人達が重いものを持ち上げるときの掛け声で、姉が少し大人に見えた。

背負子に一杯の草を、子牛の部屋の前に運ぶと、子牛はスッと近づいてきて、草の匂いを嗅ぐような仕草を見せた。子牛用の小さなまぐさ桶に、背負子を返して草を入れると、子牛は目を輝かせて、桶に鼻をつっこみ草を食べ始める。夢中になって食べている姿は、かわいかった。ひとしきり食べ終わると、顔をあげて、草の匂いを嗅いでいる。匂いごと草を味わっているふうであった。

子牛は成長し、体も一回り大きくなり、鳴き声も太くなった。そこで、鼻輪を付けることになった。親牛よりは小さめの子牛に合った鼻輪が準備された。子牛は庭の牛用の杭に繋がれた。子牛の鼻に鼻輪を通すとき、私は思わず目を伏せそうになった。父は小さなワッカのようなものを、子牛の鼻に近づけて、鼻の中に手を入れ柔らかいところを探して、一気に突き立てた。子牛が痛いと感じる暇もないほどの早業だった。

子牛は最初の頃は鼻輪を邪魔に思ったのか、よく壁にこすっていたが、そのうち慣れて気にしなくなった。外へ出るときは、親牛の後ろで、子牛は細い綱をつけてもらった。姉と私は交代で、子牛の綱を引いていく。子牛を綱で引いていくのは、どこか誇らしかった。

4

やがて、子牛との別れの日がやってきた。子牛が売られていく日である。

子牛が庭に引き出されると、親牛が悲しそうな声で鳴き始めた。別れの日がわかるらしい。いつもは平静な牛小屋に、親牛の長い太い鳴き声が響き渡る。

子牛はその鳴き声を聞いて、別れだと悟ったのか、大きな声で鳴いた。庭に三輪小型トラックがバックで入ってきた。父は子牛の手綱をとった。トラックから降ろされた板を渡って、父と子牛は荷台に乗った。

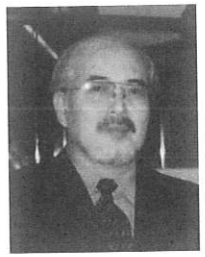
子牛は牛小屋の方をじっと見ていた。もう親牛は鳴かなくなった。子牛も牛小屋を見ているだけで、鳴かなくなった。

姉は泣くのを我慢して、歯を食いしばっていたが、私は我慢しきれなくなった。泣きながらトラックの荷台めがけて走ったが、姉に抱き留められた。その瞬間、父が手綱をゆるめたので、子牛は私の方をゆっくりと振り返った。その目は悲しそうに澄んでいた。

私は小型トラックに近づいて、手を伸ばして子牛の鼻先に差し出した。父が友綱をもっと緩めたので、子牛の鼻先が指に触れた。子牛は舌を出して私の差し出した手を舐めた。ぬるっとした感触であったが、温かかった。白い息をふきかけながら、子牛は私の手を舐め続けていた。その舌の感触は今でも思い出すことができる。

「もう、えかや」と、父は私に声をかけた。私はこくんと頷いて子牛から離れた。

トラックがゆっくりと動き始めた。荷台に踏ん張って、子牛はまだ、私の方をじっと見詰めていた。その瞳には涙が溜まっているように見えた。



八束一臣

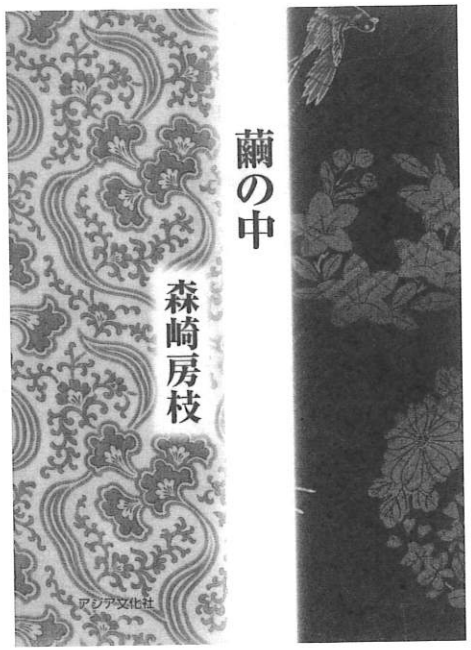
やつか　いっしん

1947　鳥取県生まれ
73　広島大学大学院（修士）終了
2012　大学教員を退職後、創作に専念
12　NHK・FM「鳥取文芸館」入選（放送）
13　「文芸思潮」エッセイ賞（奨励賞）

受賞の言葉

八束一臣

昨年度の奨励賞（「繭の部屋」）、今年度の優秀賞（「子牛の涙」）に選んでいただきまして、ありがとうございます。私は今、「昭和の子供」という連作に取り組んでいます。子供時代のことを題材にしていますが、現在の私から見た子供時代ということで、回想というのではありません。私の作品には、たぶん子供時代の視点と、現在の私の視点とが重なっていると思います。今後も、そのような方法で表現できたらと思っています。



1500円（税込／送料共）
御注文はアジア文化社まで

第10回 文芸思潮 エッセイ賞 優秀賞

小さな運び屋

竹澤一晃

外はまだ薄暗い夏の早朝、隣の部屋からザーっという物音が聞こえてきた。何事かと思いそっと襖を開けると、母が米びつから米を取り出して、白い綿の米袋に詰めている。

「そうか、今日は東京に行く日だ」

僕の役割はリュックサックに米袋を二つ入れて、母と一緒に東京まで運ぶことである。言ってみれば、闇米の小さな運び屋だ。列車に乗れるという甘い考えだけで僕は母につき合ったが、悪戦苦闘の大変な一日だった。

それは終戦後の食糧難時代の昭和二十三年夏、まだ八歳のときの経験である。

家から歩いて四十分ほどで松本駅に着くと、すでに到着していた新宿行きの始発列車にウキウキしながら乗り込んだ。始発と言うこともあって車内は空いていた。母と僕は奥の方の座席に座った。間もなく列車は出発し、岡谷駅に着いたときには満員状態となり、いつの間にか二人掛けの座席は三人掛けになっていた。

甲府駅に着いたとき、なんと運悪く闇米の車内取り締まりに遭遇してしまった。僕達が乗っている車内に「これから闇米の取り調べをします」と言って、二人の警官が前方から乗り込んできたのだ。母は荷物を足元に置き、その上に両足を乗せ、もんぺの裾を広げていた。僕のリュックは母が座席の隅に押し込むように置き、背中で隠した。しかし母のリュックは大きいので隠しきれていない。疑って調べられたら、すぐ見つかってしまいそうで心配だった。警官が来るまで話し声が絶えなかった車内は、すっかり静まり返っている。僕は警官が何をしているのか気になり、背伸びをして前方を見ると、網棚に載せてあるリュックや大きな荷物を降ろし、中を開けて調べている。米袋が見つかると、荷物を持ち上げ、「この荷物、誰のですか、持ち主はいませんか」と、言いながら周りを見回している。しかし名乗り出る者はいない。後に母から聞いた話だが、名乗り出れば食管法違反で荷物の没収だけでなく、身柄も拘束されるので名乗り出る人はいないそうだ。

「誰もいませんか。いなければ没収しますよ」

そう言うと、警官の一人は二つのリュックを没収し、入ってきた前方の乗降口から出ていった。もう一人の警官は左右の網棚を見ながら、ゆっくりと近づいて来る。僕の一つ手前の座席まで来ると、その横に立ち止まり、網棚に載っている大きな風呂敷包に手をのばした。足元にその風呂敷包を下ろして広げると、幾つかの白い米袋が出てきた。先ほどと同じように荷物の持ち主に呼びかけたが、やはり名乗り出る者はいなかった。警官は風呂敷包を持って、僕のいる座席の横まで進んできた。僕は怖いもの見たさで警官の顔を覗き見た。そうしたら目と目が合ってしまった。その瞬間、何か言われるのではないかと観念した。警官は僕を見ながら、「ぼうや、どこまで行くんだい」と、にっこり笑いながら行き先を聞いた。すると母が僕に代わって、「上野の親戚の家に行くんです」と言うと、「親戚か、いいねぇー」と言っただけで、急ぐように没収した風呂敷包を持って、列車の後方から外に出て行った。僕はリュックが見つかってしまうのではないかとびくびくしていたが、警官が出て行ったのを見て助かったと思い、母の顔を見た。母はニコッと微笑んだ。ホームを見ると、没収されたリュックや風呂敷包が山のように積まれていた。

新宿駅に着いたのは昼過ぎだった。最初の届け先の上野に行くため、総武線の電車に乗り、秋葉原で山手線に乗り換えて、御徒町駅で降りた。ここから東上野のお客の家まで、日陰のない真夏の道を五分ほど歩いた。

ここで記憶にあるのは、お客のおばさんが、汗をかいて荒い息をしている僕を見て「暑かったでしょう」と言って、氷の入ったおいしい麦茶をご馳走してくれたことである。このころ僕の家には冷蔵庫はなく、夏場の冷たい食べ物と言えば、アイスキャンデーぐらいだが、それだって滅多に買ってもらえない。氷の入った麦茶は珍しく、たまらなく嬉しくて、氷をいつまでも口の中に入れていた。

僕達は次の届け先の日暮里に行くため、上野駅に向かった。上野駅はひどく混雑していた。母は離れないようにと僕の手をとり、階段を上がるとホームに着いた。ホームもたくさんの人でごった返していた。そこに丁度、池袋方面行の電車が入って来た。電車の中は満員、乗る人が多く、みんな電車のドアに向かって小走りだ。

「この電車に乗るよ」

母の大きな声が耳に入った。僕は必死になって大人達の間をくぐり抜け、どうにか乗り込んだ。「よし、うまく乗れた」とホッとしながら、人と人との隙間から母を探すがどこにも見当たらない。ドアの方を見ると、リュックが邪

魔していて母はまだ車内に入っていない。無情にも発車のベルがなった。母は駅員に引っ張られるようにして乗るのを止められ、ホームに残された。車内の僕に向かって、母は必死に何か言っている。しかし何も聞こえない。僕は「さぁ、大変だ。どうしよう、どうしよう」と、パニック状態になってしまった。車内はすし詰め状態で、身動きが取れない。とにかく、次の駅で降りようと思い、

「次の駅で降りまーす」

今まで出したことのないような大声で、何度も何度も言ったが、なかなか前の人は動かない。後ろにいた人も「子供が降りますのであけてやって下さい」と言ってくれたが、ほんの少し進めた程度だった。そうこうしているうちに電車は鶯谷駅に到着した。僕は半べそになって「降ります。前をあけて下さい」と叫ぶように言うが、なかなかあかない。要するにこの駅で降りる人がいないのだ。一度降りたら再び乗れるかどうかわからないので、ドア付近の人さえ降りようとしない。すると、窓際にいたおじさんが、「窓から飛び降りられるか?」と僕に聞いた。

「うん」と応えると、

「じゃー、リュックは後から投げてやるから、この窓から飛び降りなさい」

僕はリュックを外し、座っていた女の人に持ってもらった。おじさんは窓を全開にし、僕を抱いて窓枠に足をかけてくれた。「うわあ、高いなあ」と思ったが、「案ずるより産むがやすし」だった。飛び降りると、足元にリュックが飛んできた。電車はゆっくり走り出した。窓の方を見ると、おじさんも、そばにいた人達もみんなが手を振っている。僕は大きな声で「ありがとう」と言って、思いっきり手を振った。

気がつけばプラットホームは、昼間だというのに薄暗かった。早く駅員さんに相談しようと思い、辺りを見渡した。ホームに駅員のいる建物がなく、西側の奥の方にぼんやりと明かりの点いた建物が見えた。僕はホームから線路に飛び降りると、一目散に明かりに向かって駆けた。途中、足元が暗いため、線路を跨ぐたびに、転びそうになったが、どうにか建物にたどり着き、戸を開けた。「どうしたんだ」と、駅員は突然の子供の侵入に驚いたようだ。僕は、なぜか涙が流れて止まなかった。

「上野駅で母ちゃんが電車に乗れず、僕だけ乗ったので、ここで降りました。母ちゃんが待っていると思うので、上野駅に戻りたい」僕は涙声で、駅員に訴えた。

「ちょっと待ってね、上野駅に連絡してみるから」と言って、電話をかけてくれた。暫くして上野駅から電話があったが、僕には朗報ではなかった。母は、駅には何も連絡しておらず、ホームにもいないという。

「どうする?」と駅員は言うものの、僕に手立てがあるはずがない。

「じゃあ、上野駅に戻ってみるか」と言うので、僕は「うん」と言って、うなずいた。

駅員は、東京方面行の電車が入るホームの先頭位置に連れていってくれた。そこは少し明るい場所だった。

電車が到着すると、駅員は運転手に事情を説明し、僕を上野駅まで乗せていくようお願いしていた。運転席には運転手と助手の二人が乗っていた。運転手が「ぼうや、特別だぞ」と言って、二人の間に座らせた。駅員が「上野に着いたら、近くにいる駅員に相談してみなさい。きっとお母さん見つかるから」と言って、希望を持たせてくれた。電車はゆっくりと走り出し、薄暗い鶯谷駅を後にした。

電車が走り出して暫くすると、運転手が「ぼうや、背中のリュックには何が入っているの?」と聞いたので、僕は母から言われているように、「おむすび」と応えた。助手の人が「それにしては重そうだね」と言うので、僕は「重くないよ」と口を尖らせた。

「闇米かなぁ、子供を利用した闇米運びがけっこう多いらしいから」僕にはあまり面白くない会話がしばらく続いた。

電車が鶯谷と上野の中間ほどに来たとき、上野方面から線路沿いを一人で歩いて来る人が見えた。僕はもしかしたらと思い、近づいてくる人を瞬きもせず見ていた。あの見覚えのあるリュックを背負った容姿、歩き方がわかったとき、「あっ、母ちゃんだ」と大きな声を上げ、運転手に分かるように指を差した。運転手はまさか線路沿いを歩いて来るとは思ってもいなかったようで、

「えっ、向こうから来るの? お母さん?」

吃驚した声で、そう言うと電車の速度を落とし始めた。

僕は母にわかるように思いっきり手を振り、大きな声で「母ちゃん」と叫んだ。母が線路を跨いで近づいてくる。僕の目に涙が浮かんだ。電車は母の前にゆっくりと横付けされた。運転席のドアが開くと、脱兎の如く僕は電車から飛び降り、母に抱きついた。「母ちゃん、母ちゃん」と言うだけで他に言葉はなかった。

運転手はあまり電車を停めておけないので、「そろそろ発車しますが、運転席に四人は乗れませんので、申し訳ありませんが線路の西側にある広い道で、駅まで行っていただけませんか」と母に、線路沿いは危ないので公道を利用するよう頼んだ。

「ぼうや、お母さんに会えてよかったね。お母さんも元気で」と言うと、電車は上野駅に向かって走り出した。母は「ありがとうございました」と言って深々と頭を下げた。母の闇米業はその日を持って終り、僕も二度と運び屋をやることはなかった。

受賞の言葉

竹澤一晃

この度は優秀賞に選んでいただきまして誠にありがとうございます。

エッセイ賞募集要項に記載された「残しておくべき重要な記憶・記録など……自由に多くの人に語りかけてください」という誘いの言葉が、私の心の隅っこに半世紀以上寝ていた記憶を呼び起こしてくれました。

戦争が終わって食糧難が続く時代のたった一日の旅路の中で、右往左往し、また人の温かみを知った体験の記憶です。山手線の電車が母の前で途中停車してくれるとは、今でもあの優しい運転手さんの顔がぼんやりと浮かんできます。

本当に有難うございました。

竹澤一晃

たけざわ　かずあき

1941　東京生まれ
4歳のとき両親の実家信州に疎開し、伊那及び松本で暮らす
10歳のとき帰京
1960　プラント設計の専業会社に就職
2001 退社し現在に至る
さいたま市在住

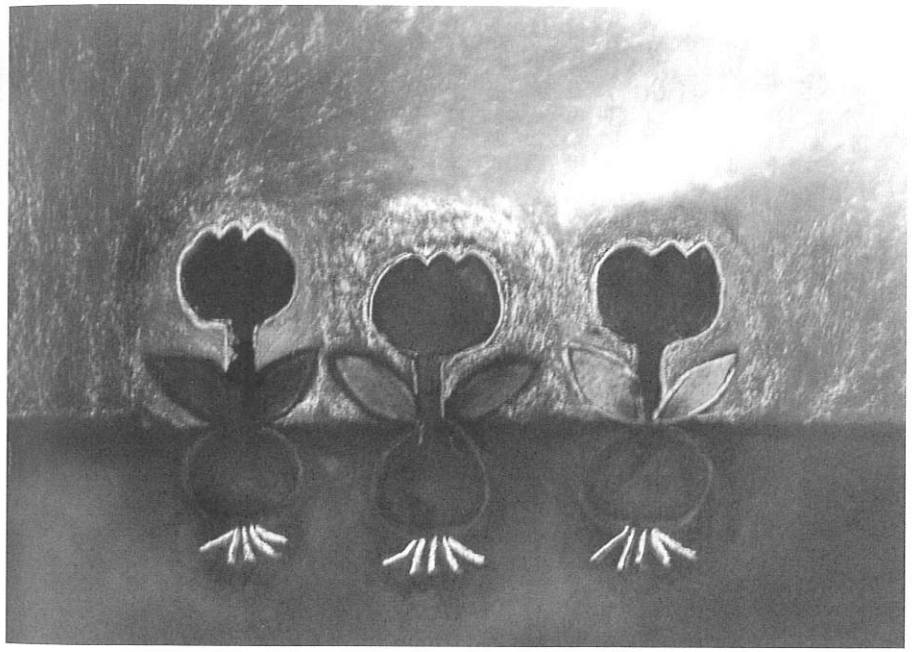


イラスト　「生きるということ」　久住　恵
第4回　イラスト・漫画賞　表紙絵部門奨励賞

Essay

第10回 文芸思潮 エッセイ賞 社会批評優秀賞

贅沢列車

濵田亜梨紗

輪郭が揺らいで、すべて曖昧に映る。晴れているはずの空にも野原にも、半透明のセロファンが一枚掛かったようだ。

あるところでは見覚えのない青物が勢いよく伸びて、また別のところでは蜜柑だか柚子（ゆず）だかわからない果実がたわわに実る。その向こうの群れは、里芋の部類だろう。蓮に似た大葉が、汚れた空気を光合成に使いながら、優雅に踊っている。

車からスーツケースを下して真っ先に、私は両の腕をブルンブルン回しながら辺りを歩いた。空港からの長旅で鈍った筋肉や細胞が、順番に叩き起こされるのを感じながら歩く。視界の右側には荒野が広がり、左側にはコンクリート造りの小さな住居がいくつか並んでいる。竹竿に直に干された洗濯物はどれもこれも薄汚くて、もともとの生地色などわかるものではない。木製の扉が無防備に開け放たれたその奥では、か細い女性が赤ん坊にお乳を飲ませている。この辺りの家々は食堂も寝床もすべて一緒くたになっているのだろう。丸い卓袱台（ちゃぶだい）の足もとにタオルケットやアルミ食器が散在しているのが見えて、私は反射的に目を逸らした。またこの感じだ……と私は思う。いつもそうだ。この国にいると、あらゆる一幕に国境を越えた不公平さを突き付けられて、妙に居心地が悪くなる。できることなら今すぐ帰って見慣れたものだけに囲まれ、飲み慣れた緑茶で喉を潤したい。こらこら、まだ初日でしょうよと呟いて振り向いた先に、今度は赤紫色の巨大な豆の木が現れて、思わず息をのんだ。ぐちゃぐちゃに絡み合ったその蔦（つた）は行き場をなくしてもなお、右往左往して隙間を見つけ出し、強く逞しく在り続ける。ここでは私の存在なんて、脆

くて情けない。

滑らかで硬い豆の皮に触れてから、私はようやく縫製工場の入り口へと向かった。

かつてアパレル商社の営業職に就いていた私は、問題解決のために中国の取引先工場を頻繁に訪れた。中国人はときどき開いた口が塞がらなくなるような失敗をし、納期や品質に過度に敏感な日本のブランドはそれを許さない。理論を持ち出せば工場に非がある問題ばかりだったけれど、現場の状況には目もくれずパソコンの前で頭だけ使って偉ぶるブランドの人間に罵声を浴びせられると、悔しくて仕方がない。かたや現場の工員たちは身を粉にして働いているのだ。日本人は厳しすぎると中国人が私に言うたび、厳しいより真面目なの！　と言い返してきたけれど、真面目が果たして何の役に立つのだと、電話の向こうで笑われていただろう。たった数日の納期遅れや小さな傷を理由に、過酷な環境で懸命に縫われた真新しい服をゴミの山にしてしまうことが真面目なら、笑われて当然だ。

赤紫の豆を見た真夏のあの出張も、問題発覚のために急遽組んだものだった。工場担当者の仲さんから、東京のレディースブランドに依頼されたモッズコート七〇〇枚の袖裏の配色を間違えたという連絡を受けたのは、八月末の日曜日。カーキの表地には紺を、こげ茶には赤の袖裏を縫い付けるはずが、量産でその逆になっているという。納期を守るためにこのまま納品させてほしいとブランドの生産部長に訴えたけれど、現地に飛んでなんとかしてこいの一点張りだった。「現地に飛べ」があのおじさんの口癖だ。現地を知らないくせに。名古屋へ戻る最終列車ぎりぎりまで交渉し続けた私に、「近くに俺のマンションがあるから時間のことは気にするな」と部長が言ったから、機嫌を損ねないよう巧く退散するという、しなくていい苦労までした。いつの時代も女ならではの屈辱があるし、その逆もあるのだろう。それから二日後の正午には南通の工場に着いているのだから、中国は近い。

もしも一昨日言われた通りにしていたら、縫い直さずに済んだのだろうか……と唇を噛んでひび割れた土を一蹴し、深呼吸したところで、仲さんが私を呼んだ。

熱気と繊維の屑が入り乱れた工場内は、息をするのも辛い。そのうえ縫製場特有の酸っぱい匂いが充満して、何もしないでも意識が朦朧としてくる。ずらっと並んだ縫い子たちはろくに水も飲まず汗だくで働き、言葉を交わす気力すらない。国際電話が鳴り、「とにかく効率よくやらせてくれよ」と生産部長に言われ、私はまた唇を噛んだ。ここにいる縫い子たちは、半分完成したものをわざわざ分解して縫い直す意味が全く理解できないだろう。それがたとえミスであろうとも、着古したTシャツ姿が当たり前の彼らにとっては、カーキに紺でも赤でも問題ないに決まっている。正直ここにいると私も馬鹿らしくなる。袖の裏地なんて何色だっていい。それよりここに冷房を取り付けるほうが先だ。

縫い子たちの不可解そうな視線を浴びながら、私はミシンの合間を縫ってサンプル室へと向かった。全体的にくすんだ集団の中で、私の染み一つないシャツだけが浮いている。これでも質素な服装を選んだつもりが……また、居心地が悪い。窓がないため蒸し風呂のようになったサンプル室に入ると、工場長が飲み物を出してくれた。なんとなく私だけが水分を摂る気にはなれず、とりあえず謝謝とだけ言ってコップをそのままに、仲さんが広げている縫い直しサンプルを検品することにした。細部まで綺麗に仕上げなければ、大量のモッズコートがただのゴミになってしまう。

へとへとに疲れ果てて工場を出ると、荒野は闇に覆われて静まり返っていた。生産ラインの補充交渉が難航し、気がつけば夜も八時半。車に乗り込もうとふらふら歩いていたら、小さな男の子がこちらを見ているのに気がついた。工場で働く誰かの子供だろうか。私が立ち止まると、遠慮がちに近づいてくる。表情がはっきり見える距離まで来たところで、彼が見ているのは私ではなく私が手にしているデジタルカメラだとわかった。その子は目を見開いて、まるで恐竜にでも遭遇したかのような驚きと好奇心を隠せずにいる。ほら……こうやってまた、ふいに私は胸を締め付けられるのだ。

私たちが当たり前に使っているものが、ここではそうではない。逆にここでの日常が、私たちにとっては映画のワンシーンのようだったりする。その日、南通市内のホテル周辺で見た光景もそう。深夜の街中で幼い子供が外国人に花を売りつけ、その傍らで母親がそれを見ているなんて、日本中どこを探しても出会えるものではない。高級車や高層マンションが飛ぶように売れるという情報だけで、中国人は日本人より金持ちだなどと誤解をする。一部の現実だけが伝えられて印象となり、他の一部の現実を生きる人々は、知らされることもなく静かに息づいている。

モッズコートの修理目処が立ち、待ちに待った帰国の途に就いたのは、出張四日目の午後。飛行機の窓から遠ざかる中国大陸を眺めていたら、不意に大粒の涙が零れてきて、私は恥ずかしい想いをした。近いようで遠いこの国との見えない隔たりが、明日にでも急激に広がったなら、もしかするともう二度と来られないかもしれない。そうなれば仲さんにももう会えないし、あんなに頑張ってくれている工員一人一人にお礼を言って回るチャンスは、今日が最

後だったかもしれない……窓に映る大陸が小さくなるにつれ、そんなことが本当にあり得るような気がして、機体が雲に突入するまで涙を止められなかった。結局は私も平和で暢気な国の人間なのだ。居心地が悪くなったり名残惜しんだり、勝手なものだと想う。

着陸すると、山吹色の月がくっきりと輝いていた。

デジタルカメラに驚いたあの子は、綺麗な夜空のことも知らないだろうか……。

あれから数年が経ち、結婚して営業職を退いた今。最近話題のｐｍ２・５について一国を責め立てるような報道がされるたび、私は腹立たしい気持ちになる。

広大な土地と安月給をいいことに、先進国は中国の郊外に続々と工場を構えてきた。住民への環境被害のことなどは話題にも上らずここまで来たのだろう。表向きには豊かさのための汚染だけれど、私が出張で見たように、今でも多くの人が貧困から抜け出せないでいる。そういった人たちのためにも、汚染の被害者面をして批判するより先に、先進国が手を差し伸べるべきではないだろうか。あらゆる生産を中国に頼ってきた以上、他人事では済まされない。汚染への責任が日系工場にあろうとなかろうと、国を挙げて取り組むべきだ。

街中でマイクを向けられた主婦が「中国は自分たちのことばかりで近隣への配慮が足りない」なんて、もっともらしい顔をする。インタビュアーが「あなたは中国製品を買わないのですか？」と尋ねれば、例のモッズコートを着た彼女は何と答えるだろう。服ばかりか私たちの暮らしを支える家具も雑貨も日用品も、その多くが中国製なのだから、きっと買わないなんて言えない。

有り余るほどの物を作っては捨て、また作る。日本を乗せた贅沢列車は、重たい荷物を他に押し付けてまでスピードを上げて、どこを目指して走るのだろう。自国の富や欲望のためだけに急がないで、静かな命や地球の未来のために、そろそろ途中下車してみてもいいではないか。誰が壊しても、誰が守っても、地球は一つ。行き先に大差はないのだから。

あのとき荒野で聞いた「何も持ち得ていなくても、こうして陽は射し、雨は降り、明日がやってくるのだ」という大地の声が、今でも私の中に響いて消えない。

受賞の言葉

濵田亜梨紗

大好きな歌に「僕らが生きる理由には、千年分の意味がある」という歌詞があります。このまま進むなら千年後、地球はいったいどうなってしまうのだろうと、この作品を書きながらそのようなことを考えていました。

この度は私の作品を社会批評優秀賞という素晴らしい賞に選んで下さいまして、誠にありがとうございます。選んで下さった方々と、この作品を読んで下さる方々に、心よりお礼申しあげます。

濵田亜梨紗

はまだ　ありさ

1983　京都市生まれ
2006　関西大学社会学部卒業
　13　3月まで、アパレル商社勤務
　14　1月より、執筆活動開始

1512円（税込／送料共）

文芸思潮文庫　540円（税込／送料共）

御注文はアジア文化社まで

第10回 文芸思潮 エッセイ賞 社会批評優秀賞

再会

高橋由紀雄

住友赤平炭鉱が閉山して二十年になる。今年六月、節目を記念して昔の仲間が集まることになった。返信された出欠ハガキに目を通していく。記憶を辿りながらなぞる名前に六十五歳以下の現役世代はほとんどいない。平均年齢五十歳での閉山だから当然のことだ。私自身七十三歳になっている。

筋骨が衰え白髪が目立つ年齢では、たとえば、転職当時の苦労や慣れない都会生活の様子などを話題にするほどの気概は残っていないだろう。閉山前に離職した人たちも含めて百人ほどが出席する予定だが、きっと遠くなった思い出を振り返り、穏やかな顔で盃を交わす場になることと思う。

しかし、あのころ受けた傷は本当に癒えているのだろうか。国の政策に抗えず故郷を離れて行ったときの悔しさや戸惑いや挫折。そのことに思いを巡らすと、組合幹部だった私の自責の念も湧いてくる。

捲るハガキの束に、東京から参加する一人の先輩の名前を見つけた。

「埋めてくれ……」

絞り出すような低い声が地を這う。だが、それに応える言葉はない。狭い坑道の最先端から「矢木！」とか「割木！」とか、支保材を求める先山（先輩）の張りつめた指示が飛んでくるだけ。

「埋めてくれ！」

苦悶に満ちた叫びが、もう一度、後方にいる私の胸を締め付けた。差し出す木材を手にしたまま切羽を注視するが、やはり、うめき声に反応する者はいない。仲間の口は堅く、黙々と天盤から流れ落ちる土砂を食い止めている。

昭和四十七年、住友赤平炭鉱地下四百三十メートルの掘進坑道で一人の男が土砂に埋まった。

当初は、側壁から崩落した石に足首を取られる程度だったが、一人の力では這い出すことができず、またたく間に腰まで覆われたらしい。同僚の知らせを受けて隣接坑道で作業していた私たちのチームが駆けつけたのは、発生から十五分ほどだが、そのときにはすでに体の半分が土砂の中にあった。先山が、下盤の土砂を剥ぐよう後山（後輩）へ指図し、自らは天盤のすき間を押さえる作業に取りかかった。しかし、次から次へと落ちてくる細かい石はとどまる気配がなく、まもなく男の体を首まで埋めた。

炭鉱の一般的坑道は高さ三メートルほどの半円で掘り進み、一メートル間隔で鉄枠を立てていく。その鉄枠と鉄枠の間に岩盤が崩壊しないよう、矢木（細い丸太）や割木（半分に割った丸太）などを裏込めしていく。ところが、軟弱な地層にぶつかると、その支保材のすき間から土砂が崩れ出ることがある。当該現場はそんな坑道の一つだった。

体全体を圧迫された男は苦痛のあまり、もはや助けを求める気力も失せたのか、いっそ埋めてくれと悲痛な声を出している。その苦悶に満ちた声は誰の胸にも突き刺さっているはずだ。しかも、首まで迫った土砂はもうすぐ顔を覆ってしまう。一時も早く救出しなければならないのは明らかだ。だが、焦りを口にする者はいない。励ましの言葉さえない。先山はうめき声にも耳を貸さず天盤を固め、二人の後山は男の体を覆った土砂をカッチャ（小さな鍬）でかき出している。そして最後山の私は、後方で材料を送り込むことに集中した。キャップランプの光がせわしなく交差し、まるで実像と影絵のフラッシュバックのように、それぞれの動作を浮き上がらせていた。

救出作業を始めて三十分ほども経っただろうか。突然、土砂が止まった。「もう大丈夫だ」と、先山が重かった口を開いてはっきり言った。後山のカッチャを握る手が動きを速める。埋まっていた男の両手が掘り出され、胸や臀部が見えてきた。膝が露出したとき、数人で引っ張り上げると意外とあっさり体が抜けた。助かったのだ。男は、当該現場の同僚たちに付き添われて、担架で坑外へ搬出された。事故跡には蟻地獄のような穴が空き、切羽は静寂に包まれた。

現場に残った数人が坑壁に積まれた木材に腰を下ろす。ヘルメットを外し、タオルで汗を拭う。数分前、死地から一人の男を救い上げたばかり。肩をたたき、喜びの声を上げてもいいはずだ。しかし、相変わらずみんな無言だ。

暗い坑内で仕事する者にとって喜怒を露わにする余裕はない。いつまた危険が迫ってくるかわからないのだ。必然、目と耳に神経を集中させる。そしてその分、口が重くなる。

だが、八時間、地下で一緒に過ごす者たちの絆は殊の外強い。狭い坑道の中で、じっと虚空を見つめているだけの

視線と、ふと漏らす深い吐息から、大きな仕事を終えた安堵感が伝わってきた。私は静かな表情の男たちの胸の中を推し量りながら、自らの心が熱くなっていくのを感じていた。

数年後、私は労働組合の幹部になった。物言わぬ炭鉱夫の声を代弁しなければという思いからだ。

実はあの事故の後、対策会議が開かれたが、そこで示された会社の保安姿勢は曖昧なもので、強い不信感が私の心に鬱積していた。

「鉱員を救出することができたのは、みなさんの沈着な行動のおかげです」と、若い職制がチームを誉めた。模範として上部会議に報告するとも言った。しかし、その言葉に、浮かれた表情を見せる者はいない。本来の課題である安全対策について、掘進作業手順の遵守という従来通りの考えが示されただけで、事故発生の根本的な原因がうやむやのままだったからだ。

先山が一言ぼそっと言った。

「炭（たん）、掘ることばっかり考えるな」と。

事故後、他の現場からも「最近、会社は坑道展開を急ぎ過ぎている」という声が上がっていた。地層の綿密な事前調査や脆弱箇所では枠間隔を狭めるなどの基本的検討が行われるべきだったが、そうした対策は置き去りにされてしまった。

当時、国はスクラップアンドビルド方式の石炭政策を打ち出し、採算の見通せない炭鉱には閉山を、存続を図ろうとする炭鉱には経営改善を求めていた。そのため、生き残りを賭けた会社にとっては能率向上とコストダウンが至上命題だったのだ。毎年のように人員削減や作業量引き上げが行われる一方、保安対策は置き去りにされた。その政策の下で、数十人の死亡者を出す災害を起こし、閉山に追い込まれた炭鉱もあった。

幸いにして、私がいた炭鉱で大災害は起きなかったが、毎年二、三人の命が奪われる事故はその後も続いた。保安対策の充実を図ろうとして組合運動に身を投じた私の意気込みは空回りし、悔しい思いだけが積み重なっていった。仲間は言葉には出さなかったが、期待通りの活動がない私を遠くから見るようになっていた。

そして昭和五十年代半ば、高年齢者を対象とした人員整理があり、あのときのチームの何人かも北海道の故郷を去った。日本は安定成長期に入り、人も物も地方から都市へ吸収されていった時代。会社から就職先だけは紹介されたが、仲間の友情が支えで生きてきた無口な男たちが、しかも五十前後の年齢で、自己主張の強い都会の中で暮らしていくにはあまりにも環境が違い過ぎた。体調を壊した、家族が馴染めない、再就職先を辞めた、などの話が風の便りで伝わるたびに私の心は痛んだ。

多くの人が傷つき悩みながら都会の中に埋もれて行った。

無言で天盤を固めていた先山はとうに他界している。必死に土砂を掻き出していた先輩はすでに八十を過ぎたはずだ。その先輩と会うのは楽しみだ。が、同時に、一抹の不安も募る。あのころの思い出を懐かしさだけで会話できるだろうか。

川が、長く留まっている淀みを、あるとき突然洗い流して行くように、私の中で澱（おり）のように付着している懺悔にも似た気持が、消えてしまう再会であればいいが。

高橋由紀雄

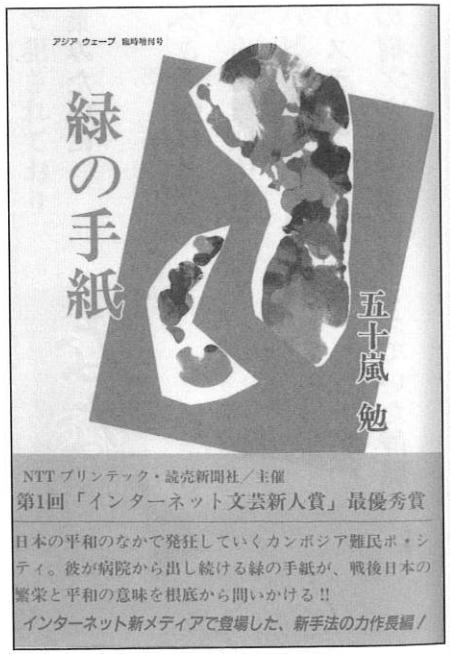
たかはし　ゆきお

1940　北海道の炭鉱町歌志内市生まれ
63　住友歌志内炭鉱に入社
75　住友赤平炭鉱労働組合常任役員
85　日本炭鉱労働組合中央執行役員

受賞の言葉　高橋由紀雄

かつて日本の繁栄をエネルギー面で支えた国内炭鉱は、国の政策で壊滅しました。その過程で事故や人員整理や町の衰退が起き、多くの人の生活が狂って行きます。

今回の作品はその一出来事をエッセイにまとめたものですが、思いを十分言い表されたか自信がありません。ですが、賞をいただいたうれしさから、新たな意欲が湧いてきました。これからも炭鉱マンのことを書きつづけたいと思います。



1700円（税込／送料共）
御注文は折込葉書でアジア文化社まで